

一、敵機ヒンパンナリ

六月二日 土

一、早朝ヨリ雨降ル

二、午後四機で空襲

三、「今晚艦砲射撃をやる云々」で妻は心配。

六月三日 日

一、二十キ来襲

六月四日 月

一、大雨降る、住宅の防空壕一杯になる

一、二十五キ飛ぶ、午後来らず珍らし

一、デマの多い世の中、今にも上陸しあうに言ふ者も居る。

六月五日 火

一、職員集合日ナルモ女教員三名（千代、マツ、キミ）ノミ集

ル、若い男教員ハ防衛召集

一、敵機一日中来らず珍らしい限り、如何なる理由にや。敵キ

が来なくても何だか不安な気がする。敵機動部隊の動きは?

六月六日 水

乙戦備下令中

一、朝から敵機八機来襲、最高十二キ

一、学校附近より吉丸部隊辺をうつ、蒸灰を拾ふ。馬が二頭傷

をうけたとか。

六月七日 木

一、戦は王家に火がついたのと同様になった。首里那覇に敵が

侵入したが其の結果、若し沖縄本島が敵に渡るとすれば此の宮古

一、防空壕当番、福里清良君夜歸る。

一、戦闘司令部の東に爆弾投下さる。

六月十四日 木

一、職員集まる、学徒隊員調査のため。

六月十五日 金

一、校長会（於奉選所）

1 疎開児童調査（郡内）

2 夜間児童訓練

3 戰時手当ノ件

4 現金回収ノ件

六月十六日 土

一、米特配ノ件ニ付東風平恵令經濟課長訪問。友利青校長、豊

岡校長、袁善校長、四名尋ねる、大抵成功す。

一、ロケット弾、定正君、波平君の宅等に落ちる。波平君を更

に小型爆弾も投下された。

六月十八日 月

一、敵機朝八時来る

一、今日の空襲は割合に穢やか。

六月十九日 火

一、昨夜甲戦備下令アリシ由

六月二十日

一、敵機午後余り来らず

六月二十三日 土

一、珍らしくも空襲なし

も見込はない。然し沖縄本島は大丈夫だろう。

一、早朝より四二キ来襲（東三〇キ、西一一キ）

六月八日 金

一、敵機最高十六機来襲

一、隊長（辻）の当番兵山田氏、長間へ移転するにて挨拶に来る

一、夕方頃パラパラ学校をうつ、僕も住宅へ居たが驚いて防空壕に入った。

六月九日 土

一、職員出校日とて男教員来る。然し校長代理で校長会へ列席した奥平茂訓導が見えないので（午後待つて）とうとう明日に延期した。

一、空襲は熾烈ならず、十二、三機のみ午後は大した事ではない。

六月十日 日 雨

一、早朝敵機（一機）の機銃音に床を離る

一、職員集合日、職員会開催五月廿七日の校長会状況伝達

一、訓導奥平茂欠

一、五月分俸渡る

一、五月分俸渡る

一、五月分俸渡る

一、五月分俸渡る

一、防空壕当番、午後六時福里出発。校長、福里清良。

六月十三日 水

一、飛行機音のみ朝一回

六月二十四日 日

一、爆音のみ聞えて撃つ様子もない、のんびりとした一日、

一、職員会日なるも高江洲君、キミ、マツ三名のみ。

六月二十五日 月

一、大型飛行艇海岸に悠々西より東へ飛んでゆく、皆びっくり

する。

一、福中、福西、加治道、嶺道、福東の児童訓練をなす。

一、敵機来らず

六月廿七日 水

一、大型飛行艇海岸に悠々西より東へ飛んでゆく、皆びっくり

する。

一、福中、福西、加治道、嶺道、福東の児童訓練をなす。

六月廿八日 木

五か所（福中、西、北、加治道等）児童出席、訓練

一、西東、仲原児童集合

二、夜間二機

六月卅日 土

一、日中空襲無し、夜二キ来て飛行場近辺の空襲。東北ノ空ヲ

二十余機南ヨリ北へ飛ンデユク

二、午後四時頃より職員打合会

一、擦前二仮小屋ヲ造ル

二、夕方頃、敵機二十キ余キタル

三、出校日ナルモ敵機ノタメ四、五十名

七月二日 一、朝四、五十キ来襲、こんな多数を一時にみたる事なし。

一、芋六斤半ト塙一〇〇匁ト交換

七月三日 一、敵機五、南ヨリ北へ通過

一、防空壕前坂小屋完成

一、児童授業、視学來

七月四日

一、敵機の来襲が最近少なくなった。本土作戦と支那大陸作戦に移行したためらしい。

一、沖縄本島に機動部隊が盛んに集結中との事だが、どちらへ向ふのか疑問である、敵は本土と支那大陸をシヤ断するため済洲島や対馬に上陸を企図し、盛んに空襲を行っているとか！

七月五日

一、空襲無し、但しB24か北海岸を東より西へ悠々と飛んで行った。

二、村常会（午後五時）支庁長、池間中尉、勝木少佐、一之瀬参謀長の話あり。殊に一之瀬参謀長の話は受講者を憤起せしめた。「日本全国で此處よりも強固な陣地と兵力のある所は少ない、勝つためには無理と思い乍ら民にも要求する」

七月六日

一、給仕は今日返出校

二、長い間ひだりが続くので農民、私自身心痛の種だ。物皆が

て降る

二、敵機一キ海の中を飛ぶ

七月十六日

一、台湾へ上陸シタナンテ、デマ飛ブ

二、十日ニ東京、大阪方面其ノ他ノ本土ヲ一千九百四十キデ空襲シタ由

三、宮古島必勝論説ム

一、午前中、増俸内申書ヲ書ク

二、敵飛行艇東側ヲ一キ飛ブ

七月十七日

久しぶり、疎開した人々から通信あり

一、使丁と共に出平、用事左の如し

1 国防献金五百五拾七円五拾錢也支庁へ納付

2 増俸内申ノ親辰書提出

3 特配米四升八合の十一名分、特配鑑節運搬

4 貯金払戻一七〇円

二、朝敵機十六、七キ東の空を台湾へ向って飛びゆく

ぶ事一仏印派遣冬第三五四三部隊山下隊

七月十八日

一、爆音聞ゆるも敵機見えず。

七月十九日

一、爆音聞エ敵機見えず

七月二十日

水添しさうだ。

七月七日

一、五時頃空襲アリ、授業ナシ（六、七機）

二、夕方、清水信良氏来ル、芋十斤

七月八日 一、午前八時頃敵機六機来襲

二、防空壕当番

一、防空壕当番

二、平良へ行く

七月十日

一、空襲無し

二、米五斗二升二合、鰯八斤配給

七月十二日

一、魚釣一二〇匁のタマン一匹

二、敵機十二、宮古上空を八重山へ向ふ

七月十三日

一、魚釣三斤一二〇匁ノエイトタマヌ（一三〇）一匹

二、敵機二、三〇キ来た由

七月十四日

一、魚釣一匹も釣レズ

二、爆音のみ聞え敵キ来ラズ

七月十五日

一、朝雨少し降る、清水氏ニ歴史教育、建設青年団、暫らくし

七月二十一日

一、昨日に引続き御真影当番

二、飛行機一機のさばるか？（防護警報発令）

三、何時もより早く帰校（宅）

七月二十二日

敵機来らず幸なり

七月二十五日

一、校長会開催、御真影ノ陰乾

一、来間の嵩原秀雄君と砂川芳江君新発明の爆弾で爆死を遂げた由、来間の教頭仲松君より聞いて驚く

七月廿六日

一、夜今泉伍長と漫談す、明日ウヅラ嶺の方へ引越す由

部隊長や将校連に挨拶す

七月二十八日

一、午後五時から村常会出席

1 食糧増産ノ件

2 協定値豚一一〇円、芋六円、魚五円、牛八円、馬七円、アワ・キビ七円

七月二十九日

一、突然の空襲、三、四十程南より北へ撃ち乍ら逃げる

七月三十日

一、職員出校日、女教員は朝ヨリ出校、職員会日なるも職員不在のため開かれず空しく帰る

七月三十一日

一、午後五時頃空襲あり（五、六キ）

一、職員集会日なるも職員大多数来らず

八月一日

一、未明爆音あり

○一ヶ月間程、足と身体全体に倦怠感があつた。過労（増産）の結果、だらうから其の中に恢復するだろうと考へていたが、それは間違いだった。矢張胃が可なり収縮しているために食物の消化が出来ず栄養攝取が困難なために起る現象だ。

八月三日

一、大雨一日中降る

一、今日は出発せず、一体マラリアなのか、流行の擬似デング熱といふものなのか？

八月五日

一、今日ヨリ農士館取壊（全く相談ナシ）

八月六日

一、飛行艇悠々西の方へ飛んで行く、じゃくな事。

一、三斤四、五円山羊肉を買ふ。一斤八円のスクガラスを買ふ

八月九日

一、職員出校日、平茂、清良、高江洲ら来る、六畳間を久しぶりで元の通りなす

八月廿一日

一、勝太郎君来る。樺太も、沖縄も共に日本領土に入る事になつたとか。但台湾が問題の中心になつてゐるとか。

八月二十四日

一、「戦争終止ノ詔書奉読式」舉行

八月廿六日

一、東軍医ニ診療注射シテ貰フ、三名（僕、嘉美、加代）ニ投

九月四日

一、校長会（異動）、平茂さんをよこす

九月四日

一、支庁ヨリ急使來り、御奉焼御眞影報告の公文提出スルヤウ、通譲公文ヲ渡ス、間ニ合ハス（臨時賞与ノ公文モ共ニ）

一、役場に額ヲ出ス

九月五日

一、東軍医診察、投薬、身の上話や妻帯の事等語る。嘉手刈千代さんを出来るなら貰いたいといふていた。

九月六日

一、「明日午後七時を期し御眞影を御奉焼」スペキ公文（親展）來り驚く。沖縄、南西諸島は如何？

八月三十一日

一、昭和二十年七、八月ノ相場。一斤參拾円ノ豚肉、一斤拾五円ノ山羊肉、一斤拾円ノ魚、本月が一生涯ニ始メアル

一、畏クモ今日十七時、御眞影ヲ焼却の予定

一、本日東軍医診察、熱発セズ

九月一日

一、畏くも昨日午後九時頃迄二〇〇〇を御奉焼セシ由島田氏ヨリある。何だか胸に迫るものがある。

一、居留民として取扱ふのか、米の国籍に入れるのか、僕等官

一、高江洲、福里、防空壕当番

一、午後から職員集合、僕、平茂、キミ三名ノミ出席

八月十二日

一、露西亞、日本へ敵対した由（越境）

一、敵機一機の音、始終聞ゆ

一、敵機二機偵察

八月十六日

一、昨日（八月十五日正午）嘆遂ニ屈服、条件（ボツダム宣言）ノ下ニ「戦争終結ノ詔勅」ノ下賜セラレタリ、一億国民ノ悲嘆筆舌ノ尽クスベキトコロニアラズ、全国津々浦々哀愁戸オクニ満チ紀元以来ノ日本民族ノ悲慘事ナリ、一等国民ヨリ弱少国民ニ転落セル日本民族ノ将来ハ如何ニナリユク

八月十七日 火

一、職員出校日、平茂、清良、高江洲ら来る、六畳間を久しぶりで元の通りなす

八月廿一日

一、勝太郎君来る。樺太も、沖縄も共に日本領土に入る事になつたとか。但台湾が問題の中心になつてゐるとか。

八月二十四日

一、「戦争終止ノ詔書奉読式」舉行

八月廿六日

一、東軍医ニ診療注射シテ貰フ、三名（僕、嘉美、加代）ニ投

九月四日

一、校長会（異動）、平茂さんをよこす

九月四日

一、支庁ヨリ急使來り、御奉焼御眞影報告の公文提出スルヤウ、通譲公文ヲ渡ス、間ニ合ハス（臨時賞与ノ公文モ共ニ）

一、役場に額ヲ出ス

九月五日

一、東軍医診察、投薬、身の上話や妻帯の事等語る。嘉手刈千代さんを出来るなら貰いたいといふていた。

九月六日

一、「明日午後七時を期し御眞影を御奉焼」スペキ公文（親

斯くの如きになるとは？

一、今泉伍長來訪

九月七日

一、役場へ行く。東条英機や米内光政が暴漢のためやられたと

か。

九月八日

一、校長会（十日）ノ公文ヲ平茂氏の所へ持たす

九月九日 雨降る、風交り

一、常会出席、日本刀、ピストル等を隠匿せず提出の事

九月十日 雨降る、風交り

一、校長会（奥平平茂氏代理出席）

一、各貯金帳より合して貳百八拾円程払戻をなす

一、今日亞米利加兵が十三名程来るといふ噂だが！

九月十一日

一、防空壕前の小屋を給仕と二人で取壊す

九月十三日

一、明後日より出校に付職員の打合会をなす、校長会伝達も兼ねる

九月十五日

一、今日より児童出校（午前二時間）

一、高等科児童ニ耕ヤサシム。英語を教へる

九月十六日 日

一、東軍医診察

九月十八日 火

増産休業

一、一難去つて一難来る。マラリアのみと考へていたが気管支炎が既に始まつたらしい。然し此だけは抵抗療法で全快する事が出来る。疲労感あり（少し歩いた後）

一、東軍医殿の診察をうける

九月二十九日 木

一、職員出勤、平茂、高江洲、上原、僕四人

九月廿一日 金

一、今日は仲秋明月の日なり

一、夜東軍医、松本中尉、飯島准尉遊ぶ

九月廿一日 土

一、職員出校日（欠勤、西里、島尻キミ、下地ヒデ）

一、住宅で奥平、上原両先生の送別会あり

九月二三日 日

一、福里清良君「明日児童出校の公告」を書く、昼食を其に

す。

九月廿四日 月

一、五十四機の米飛行機富士上空飛翔、今日海空より米軍進駐する由

一、東軍医来診

九月廿八日 金

一、児童、職員集合、東部の生徒多數、職員督促

九月廿九日 土

一、授業始まる、朝会ト第二ラジオ体操、何時モヨリ児童多数。

二、野球練習試合アリ

九月卅日 日

一、友利克、郵便局デヒヨックリ出合フ、四、五日前台湾カラ来タ由

一、小野寺伍長夕方遊ビニ来タル、岩手県人

十月一日 月

一、授業アリ

一、米軍リ校舎状況調査、役場デ対話、煙草ヲ貰フ

「皇國の道」に生きた教師

下地村字豊原（現上野村） 仲 元 銀太郎（三十五歳）

「皇國の道」の研究と実践

研究訓導という名で三重県に出向したのは昭和十六年四月でした。この月からこれまでの小学校が国民学校にかわり、ぼくらは皇國民で、いわゆる「皇國の道」とはどういうものであるか、そのころはもう「國体の…」とか「臣民の道」とかいう本も出ていました。そういうものをすつかり空で言えるほどに読みましたね。このときの研究訓導は池村一男さんと私の二人で、彼は愛知県に行きました。私は三重県でもっぱら皇國の道とはどういうものであるか、学校の教師としてどうあらねばならないか一きだえられました。勿論向うの教師たちも同じようにやっていました。最初の夏休みは家族のいる宮古に帰りましたが、二年めの昭和十七年の夏休みには帰らずに、五十鈴川に行ってみそぎをされました。

三重県では、皇國の道とはどういうものであるかという研究が、それはもう盛んなものでした。あらゆる教科にわたってですね。すべての教科で皇國の道に則りというふうな言葉があるために、じゃ一体皇國の道とは何を言うか、算数にも皇國の道というのがあるのだろうか、そういったような研究をするわけです。結局算数なら算数、理科なら理科を当時の教科書にもとづいて一生懸命研究するのですが、皇國の道である—そういうふうな発表をみんなやっていくわけです。私は修身の研究を大々的にやりました。これまでの私たちの

教育というのはあまりに個人の悲しみを追うというふうなものであったが、人間を追うということは国家的な人間であるということ、國家をはずした人間というのではない。具体的な人間とは自分の属する国があつて、その国が危殆にひんした場合、国家とともに運命をともにするのが人間の生き方だ、そういうふうな発表をしました。

名張町を中心阿山郡と名賀郡の二つの郡にまたがる教師ばかりの研究発表会でした。名張は皇國の道に則つての研究の実にさかんなところでした。少年団訓練が猛烈になつてくるし、毎朝の早朝訓練というのもありました。これらが終つて子どもたちは帰宅し食事をすませてからまた登校していました。

昭和十六年十月ごろ、戦争突入への準備だったと思いますが、皇后陛下が伊勢神宮にお参りすることになりました。校長からいい機会だからお前も奉迎するようにと言われて生徒の代表をつれて行きました。宇治と山田の間あたりで、迎えるわけですが、向うの人たちは勿体ない有難たいといつてみな泣いているわけです。ところがぼくは涙でもない。ぼくは沖縄にうまれたからそういう国民的意識が低いんだ、恥ずかしいと思、劣等感にとらわれたものでした。翌日の新聞は、陛下を迎えるのに蛙の声さえ一瞬止っていたとか、木の葉も一瞬なりを静めたとか書いてあるんですよ。私はそれを読んで、それほどのことだったのか、ぼくはほんとうに一生懸命やらなければ日本人として彼らに伍して日本人の顔はできないんだと思いましたね。それでますます努力して彼らに追いつこうという気持ちになりましたね。また、彼らほどにそういう気持ちがないとみられているのではないかと思って、研究会などすべて引きうけて一生懸命

やりました。

昭和十七年には四日市の国民学校に転任したが、そこでもまた軍人援護教育研究会というのがあつて、それもやりました。その学校出身の英靈の室を学校にこしらえてお祭りをする。そしてそこで英靈の業績をれいれいしく話しをして聞かせたり、英靈室での作法を教えたり、そんなことを私がやつたわけです。それから出征軍人の家に高等科の生徒をつれて行つて稻刈りをしたり除草をしたり、非常にさかんでした。授業は午前中でうちきつて、その部落の生徒を部落ごとに割りあててさせるわけです。私は高等科一年生をうけもつていたが、高二の受けもちの加賀美信先生も非常に軍人援護には熱心なんで、のちに三重県の指導主事になるほどの方でした。

避難訓練と防空壕掘り

二か年の研究訓導生活を終えて昭和十八年四月宮古に帰りました。神戸から船に乘ろうとしたが、敵の潜水艦の出没がはげしいのでいつ出るかわからない、またいつ出るとも言つてくれない。私は、いつ出ますかと聞いて叱られました。お前らがそんなことを言うからもう行けないと。ただいつもそこにおれとだけ言うのです。毎日波止場に立っておれと。私は神戸の旅館に十日ばかり滞在しました。そうして、きょうは出ませんかと聞くだけでも叱られるので、ただ毎朝早く波止場に黙つて立つていました。そしたら耳うちしてくれたわけです。誰れにも言わないでなかで待つていなさいと。大阪商船でしたが、いざ出港しても直ぐ行かないで、途中あちこちに立ちより宮古に着くまではおよそ一ヶ月くらいかかる

りました。

再び新里国民学校に帰えり、一学期間は毎日毎日生徒と一緒に防空壕掘りです。それと避難訓練をしました。そのほかは学校のあいだで軍人援護の研究会をやりました。ここではもつとも熱心だったのは砂川玄慶さんです。当時教頭は与那禪金一郎、次席が保栄茂（皆川）玄認、その次ぎが砂川さん、つぎがぼくというかたち…。実はかんな研究会で、軍人援護の研究会といつても実際には士氣鼓舞の研究会でしたから、教師たちはみな各部落にわりあてられ直接行つて指導するのです。

昭和十九年八月、家族は台湾に疎開させました。子どもはそのころ三人いましたが、新里校で教員していた家内が長女（小二）長男（五歳）二男（一歳）をつれて台湾に疎開、台北とキーレンとの間にある板橋国民学校に行きました。十一月ごろからはもう空襲のため授業はできなかつたよう思います。部落のあちこちに分散して授業をしたが、二十年春の卒業式は十人ぐらいの生徒で、金榮先生と二人で送りだしました。

虫ヶラのように死んでいく教え子

わたしは防衛隊に召集され、教えの十六歳～十八歳の少年たちの隊長をつとめました。少年たちは「肉攻隊」とよばれ、敵は宮国方面から上陸するだらうからといでの、新兵器だという十キロ爆薬をついて戦車に投げて死ぬんだー毎日そういう訓練をさせられました。ほふく前進とタコッボ壕に入つて投げる練習です。毎日が死生と二人で送りだしました。

中飛行場の近くで、飛行場を襲撃した敵の機銃にやられ、麻酔なしの手術をうけて悲鳴をあげながら死んでいきました。非常に残念でたまらない気持でした。

終戦についてはよくわからなかつたけれども、ある日軍隊全体がシーンと静まりかえつて、「まるで死んだように。何かあるなと感じていましたところ、ある将校が「もう家に帰つて、食糧でもつくりなさい」という。これで敗戦を知りました。それからしばらくして将校は、復員するまで軍も食糧をつくるので畑を提供しようと部落の人々に言えといでの、部落内を案内したが、隣りのおじさんから「自分らも大変なめにあつていて、畑まで軍にとられたらどうするのか」ときんざん叱られました。ある日私が畑を耕していると、軍曹がきて「そこを自分らにやれ」という。「何でいい畠ばかりとうとするのか、嫌だ」と言つたら、怒つて大隊本部につれて行くと、大変な剣幕でした。あのときはこわかつたですね。実際にやくもありました。お前らがこういう調子だから戦争に負けたんじゃないいか、お前らには人間らしい気持がみられない。ただ猛々しいだけで威張りちらしているじゃないか…。おもしろくなかったですね。ぼくらは戦争に負けて残念だと思つていましたからね。

しかしある一面、負けたときいてホットとした気持もありました。戦争がもつとつづいておればどうなつたかわからないし、それにもし勝つておればまったく世の中は軍の思うがままになつていただけますね。軍政が日本の政治の常道になつていたかもしませんからね。上野にいる兵隊たちは昭和三十一年一月ごろ復員しました。隊長がよく家に遊びに来ていたので、そのことはよくおぼえていま

す。「自分らはもう行きます。しかしこれは決して日本が敗れたからじゃない。ただ日本の歴史がそういうふうに、日本の歴史には幕府があつたが、アメリカも一つの幕府であつて、いつかまた天皇によって取りはらわれ元の日本が出てくるんだから、それを信じて子どもらをうんときたえてくれ。」どの将校も私にそんなことを言つていました。

妻子をつれに台湾へ

終戦の年の十一月ごろ、栄丸遭難のはなしが聞こえてきました。台湾に疎開した妻や子がそれに乗っていたらどうしようと思うと、気が気じゃないわけです。ぼくは気がくるつたようになつて無意識のうちに海岸を歩きまわつたりしていまして。何しろ宮古には自分一人いて、妻子はみな台湾に疎開させたのですから。みんな死んでしまったのじやないかと思うともう居ても立つてもおれなくて……。池間に渡つて台湾に出る船はないかと聞いたらないと言ふ。仕方なしに平良へもどつてきましたら、ちょうど真榮城徳松さんが船を出そうとしているところでした。すぐお願いして乗せてもらいましたが満員でした。船はスオウからキールンに着きました。そこで栄丸遭難の生残り山内朝二さんに会つて当時のもよを聞きました。池村一男さんは一たん乗つてからおりたということでした。宮た。池村一男さんは一たん乗つてからおりたということでした。宮古に帰る船を待つ人たちみんな大変なところにいました。戦災にあつたがらんどうの倉庫のようなところにみんないましたが、便所もそのなかです。あれだけたくさん的人がほんとうにみじめなものでした。

2、学童疎開

或る校長

平良町東仲 砂川 恵 敷（四十五歳）

昭和十八年当時平良第二小学校、今の北小学校の校長をしていました。戦争が次第に激しくなつて次の時代になつた小学生を安全な場所にうつすよう文部省から疎開命令が出来ました。私の家族も年とつた母と私が残る事になり、妻と子供三人が、宮崎県へ疎開しました。

子供たちを親元から離すという事は父兄にとっては大変な事であり、文部省の方針に従つて父兄の説得が出来る校長は手腕力量のある校長と云う事になつてました。毎日家庭訪問をした。父兄との話し合いの中で、問題になつたのが、引率教師として誰が行くのかと云う事です。その時希望を申出たのがS教師でした。所が父兄の方からS氏の引率ではやらないといい出し、大半の父兄からM教師ならやつても良いといって來た。困つてしまい、引率希望のS氏に辞退してもらい希望していないM氏を説きふせる事になりました。出来るだけ夫婦、でなければ女性教師を資母役としてつける事になつており、独身のM氏にはいろいろ私的な事情もあつたがやつてお書きふせて、結婚式をあげ、明日発つという晩に、酒一升くみかわしくみかわして、翌日は子供たちをつれて出発した。当时、恋愛などしようものなら、クビになつてしまつ、今思うと、彼等夫婦の結婚は結婚費用の一銭もかけず、ただ握手と一升の酒で、せきたてられる様に宮崎へ発つ事になつたのです。そして僕は國の方針に従つた「優秀な校長」と思いこんでいました。平二小学校のほか下地小学、平一小学校の三校の生徒達が、出発しました。昭和十九年八月十八日の事です。平良第一小学校の東半分はすでに兵舎として接收されてしまつたし、疎開で空家になつた民家や、お隸の森の中で疎開しない生徒達の分散授業が行なわれていました。間もなく次第に増えて来る兵隊で、校舎は全部とられてしまつた。

天皇の写真を御真影と云つてはいたが、家庭庭に防空壕を掘つて、十月十日の空襲以来、それをしょって壕の中に移すのが校長の最大

さいわい妻子は下地シゲ稚婆のやつかいになつていて、池村さんたちのようないじめな思いはしません。台湾ではもう日本のお金は使えず、平良恵盛さんが交換してきてくれました。恵盛さんだけは服装もぱりつとしてうらやましかつたですね。一週間くらいして宮古に帰りましたが、どこの船に乗つたのか、船貨がいくらだったのかおぼえていません。

戦争中、教師をしていた私は、あのころ戦争はいけないものだと考えたことはありませんでした。戦争をやつてはいけないというよりも、むしろ日本がそういう方針ならばぼくらは運命をともにしなければならない、そんなふうに思つていたようにおぼえていました。自分が国家の政策を推進していかなければ日本はいけないんだというふうに、國家権力の末端である師範学校を出ていたのですから、當時としてはそう思うしかなかつたように思います。

の任務となつた。相次ぐ空襲で、ほとんど壕の中においておくのが毎日の様に続き、混気で、シミでもつけたらそれだけで、進退うかがいを出すはめになる時代だつたし、それこそ氣を使うのです。壕の人口から見ていると、西の空を飛ぶ飛行機はまるで山羊がうんこでもする様に、バラバラと爆弾を落すのが見えるのです。近くにある漿水港を目指に落としているのだと思つてましたが、港だけではなく、宮古神社をも目標にして、そうとう爆撃してしました。今にして思えば神国思想を打ち破るためにあつたと思うが、どう見てもあんな大きな鳥居があるし、軍事目標にはならんと思うが、めちゃめちゃに破壊されていた。そのうちには海岸ぞいの民家がやられ始め、北側にはニヤーツの海軍兵舎があるし、平二校の校舎は兵舎だし危険区域になつてしまつた。わが家庭の先東南部にも不発弾が落ちた。道行く兵隊をつれて来て見せると五百キロ爆弾だと云つて、その兵隊にトマトをやり、不発弾を運び出すようたのんだ。南隣の空地にあつたたこつぽに入れて目じるしの旗を立てて皆待避しました。所が何日経つても爆発しないし、近くに兵站部隊があつて、その兵隊にトマトをやり、不発弾を運び出すようたのんだ。南隣の空地にあつたたこつぽに入れて目じるしの旗を立てて皆待避しましたが、あれが爆発しておこうものなら、家どころか壕のすぐそばだつたし私の命も、御真影ごと、どうなつていたものやら、今でも運よく命びろいしたものだと思っています。

町の中が無差別爆撃される様になり、近くの池間さん宅に不思議な爆弾が落ちました。そこに建つてた家がなくなつていてるので、大掃除したあととの様に瓦のかけらも見あたらぬのです。爆弾の穴は見あたらず、よく見ると、そこに入れていたものやら、今でも運よく命びろいしたものだと思っています。

胴体だけが、ほこりまみれになつてころがつてゐるのです。疎開して空家になつた家を借りて、多良間の人が一人住んでいたとの事だつたが、多分その人だつたと思われる。恐ろしくなつて氣分が悪くなり、目をおう様にして帰つて來た。

北小学校舎は全壊し、運動場は大型爆撃で井戸の様な深い穴がいくつもあけられ、すつかり地形が変つてしまつてゐた。

次第に激しくなる空襲で、穴だらけになつた飛行場の弾痕の穴をうめるのに、飛行場周辺の石では間に合わなくななり、町中の民家の石垣をくずしてもつて行くのです。

夜、トラックで乗り込んで来て、私の家の石垣もくずし始めました。西側の道路との隔ての所ですが、そこは便所があるのであります。そこをくずされると道から丸見えになり用たすにも大変困るのであります。そこをとると困るんだがと云つたら、「軍のやる事に文句があるか名前は何んというか」と云うのです。「取るなとは云つておらん」とるなら南の方をとれと云つてゐる」と云うと、懷中電燈で私の顔を照らし、「日本が興きるか亡びるかの時に君は反戦思想を持つている！」とどなり、「出てこい」と云うのです。出て行つたらやられるに決つてゐるし、出て行かなかつた。名前だけを云つたら手帳をとり出して名前を書くのです。何かあるとスパイ嫌疑をかける時代で、内心こわくなりながらも意地になつてゐた。よく見ると僕の息子くらいの下士官だったが、間違つた事は云つておらんと思いながらも、あとで何かあるのではないかと心配した。結局、くずして持つて行つた。あとで石を集めて来て、積み直した。あの当時、A校長は白いシャツを着けていただけで、スパイ嫌疑をかけられ、

大変困つてゐた。

そのうち、軍の命令で野原越の司令部近くに宮古全島の学校の御真影を移す事になつた。男子教員は二人ずつ交代でその護衛をしろといふ事になりました。夜もそこで泊つて番をするのですが、その頃からもう戦争は負けるのだと捨て鉢氣分もあり、夜は抜け出して部落に行き、密造酒など飲みに行つた。

長男は第七高等学校の半ばで長崎の造船所に学徒動員されているし、次男は家を出る時、いつもは、「行って参ります」という子が「行きます!」とだけ云い残して予科練に行つてしまつた。生きて会う日もないのではないかと、人の子に「聖戰遂行」のため征くべしと教育した手前、自分の子供にだけ内緒に、これははじめからおかしな戦争だから征くなと云うわけにも行かず、息子たちも征つてしまつた今、じめじめした穴の中で写真の不寝番をしている空虚な気持はやりきれない想いでした。あの頃は酒も煙草もほとんどのくなつて工業用アルコールを飲んで失明するものが出たり、死者が山なりしました。煙草は何か煙が出るもので喫えそなものを、例えは松の葉や、野イチゴの葉、ヨモギの葉、あとはトマトの葉などを喫つてゐた。

戦争が終つて昭和二十年、八月三十一日、野原越の御真影を焼く事になつたが、日本軍の高級将校たちが立会つて、ガソリンをぶりかけ、年長の校長が火をつける事になつた。手がふるえて、とても出来そうにないと涙を流しているのです。代りに、私が火をつけました。すべてが終つたと云う感じでした。

所が終つてないなかつたのです。世の中が百八十度転回したと

いうのか、今まで々優秀なA校長であつたはずの私の家に、「疎開させた子供たちはどうしてくれる」と毎日の様に子供の父兄たちが、「いつ帰してくれるのか」とおしかけて來たのです。宮古島は玉碎して全滅するはずであつたし、こうして連日の空襲にさらされはしたもの生き残つた人たちは吾が子の安否を氣づかつて、抗議して來るのです。音信は不通、行くに船もない状態では返事のしようがないのです。羽があれば飛んで行つて見て來るのだが、と思案にくれているうちに、台湾から砂糖を積んだ五十トンくらいのヤミ船が入港し、近日中に本土に向け出港するという噂が入りました。その船主に頼みこんで乗船する事になりました。与儀達敏任命町長に会い、何かの時に役に立つからと、「疎開児童の調査員を命ず」と云う辞令を書いてもらひ。海賊だつたという噂のある、別名ミンナガニクという人の船に乗りました。航海中、アメリカの飛行機が低空で旋回して來ましたが、五日後、無事に枕崎港に着きました。汽車の乗車券を手に入れるのに、三日三晩も立つて順番を待つと聞かされ、思案にくれてゐるうち、こんな時のためにと用意しておいた辞令を、その町長に見せ、駅長を紹介してもらいました。駅長が来ると言ふ事で、集団疎開した子供たちが、二百名くらい校門の所まで出迎えてくれましたが、顔色は、思つていたよりも良く、ただ服装が見すばらしいのが目につく。ボロ毛布ならあると云う事で、その晩、子供たちと一緒に寝る事にした。引率のS夫婦にきく

と、児童の一人が陽テバスにかかり、人の子をあずかつて来て、死なしてしまうのではないかと徹夜の看病をしていたこと、下地小学校から來た児童が望郷の想いがつのつて宿舎を出て行き、駅前でボーツと座っている所を、学校中が大きわぎになり、さがしてつれ戻した事、とうとう平一小學から來た子の一人は行方不明になつてゐる事など聞かされました。翌日、その校長に会い、世話になつてゐる御礼の挨拶に行きました。好きこのんで御世話になつてゐるのではないから國の命令で、その政策に従つただけだから、帰るまでは世話して與れる様頼んで、私の家族のものは一緒にヤミ船で帰るというのを、今、家族の者が先に帰つたら、児童たちの父兄が何と云うか、ますますつらい立場に立たされる事が明らかではないと説得して、ひと足先に帰りました。疎開地での子供たちの無事を知らせ、父兄たちも、安心した様でした。あれから二か月たつて昭和二十一年二月、集団疎開児童達は帰つて來ました。

児童たちに会いに宮崎をたずねた時、宮古は無事だったと云えば、この子たちに異郷で苦労させた事の意味がなくなるし、宮古は大変つたと云えば、皆が心配するだらうし、最初の言葉をどう云うべきか、苦慮したものです。はからずも疎開児童の父兄の一人が銃撃をうけて、死亡した事を話してしまい、それを聞いた子が、一晩中泣いていた事を思い出し宮古に帰りつくまで伏せておくべきだつたと思うと、今でも心が痛むのです。

あの時、行方不明になつた子の父兄は、自分で宿舎を出て行つたのだから、あの混乱の中では致し方ないと云つていましたが、今でも島に帰つていません。

飢えと寒さにふるえて

平良町下里 下 地 明 増（二十七歳）

出発前夜にあわただしい結婚式

その当時、疎開児童が平二校からも行くことになっていることは知っていました。ほかにどこが行くかはわかりませんでした。だれが引率するかということもまだ決っておらず、あとで聞いた話しだは私の前にほかの人にもいろいろ話はあったようです。校長によばれて疎開児童を引率していかないかと言われたとき、私は独身だし、家庭的ななかわりもないし、当然行かなければならぬだろうと覺悟はしていました。また、ことわる理由もなかつたし、行ってもいいという気持もありました。しかし兄の了解はとつておきたいと考えて、応召して宮崎県細島にいる兄に電報をうちました。

私としては、どうせ行かなければならぬだろうというよりも、ほかに適任者はいないのなら引き受けねばならないだろうという気持ちもあつた反面、行くことが何とか卑怯なような気もしました。一般の人びとは島に残り最後まで島を守るんだという構えでいるのに、若いものが、如何に校務で学童を引率していくとはいえ、何となく戦争から逃避するような、そんな疑問もあつたのです。あわせて兄は軍人であるし、あとで叱られても困るという、兄弟としての気持もありました。

兄からの返事は「白虎隊を組織して島を守れ」ということでし

た。私は、やつぱりそうだ、こういう大事なときに島を離れるこ

は卑怯なことだ、最後まで島を守ろう、こう決心して、校長にはなしたところ、校長はこんこんと私をさとされる。学童疎開は國の方針である、軍の命令である、決して卑怯なことではない、沖縄があるは宮古がどうなるかわからんが若い世代の子どもを疎開させて教育をつづけねばならない、これは決して避難ではなく安全な場所で教育をつけ次の世代に傳える、次の世代を守ることなのだと言されました。ここではもう教育はできないから希望者はみんな疎開して教育をつづけ、次の日本を背負う国民を育てるのだと言われました。

こうまで言われことわることはできない。またもう一度兄に相談することもできない、自分で判断するほかないと考え、承諾しました。疎開児童は初等科三年生男子一人をふくめて高等科まで男女二十人だったとおぼえています。出発は昭和十九年八月十八日でした。

行くと決つてからがまた大変でした。年とった父が、これでもう生涯あえないかもしれないから最後の孝行だと思って結婚してくれという。さあだれにしようか、その晩のうちに父と二人で申し込みに行って、承諾をうけたのが出発の前々夜でした。さっそく翌日、式はあげないが親戚どうし内輪だけのお祝いをということになりましたが、私はもうそれどころじゃない。疎開児童の名簿づくり、それから役場や警察へ行っての手つすき、学校の仕事の整理もあるしで、ようやく終つたのが夕方の七時ごろ。学校は送別会をやるから一心亭へ来てくれという。父兄の方は郵便局官舎で学童疎開のための連絡をかねた送別会をやると言つてきました。

七時ごろ事務的な仕事をすませたあと、職員会の送別をうけ、九時ごろからは父兄会の方へ顔を出すことにしました。ところが会場の郵便局官舎へ行く途中に私の家はあります。今晩家では私のための簡単な結婚祝いがある、しかし一たん立ち寄ればもう動けなくななるだらう、何しろ花婿なのだから。私はスフのシャツとズボンを着けていたが、通りすがりに石垣ごとにのぞいてみました。モンペ姿の花嫁が親戚を接待しているのみて安心。九時からの父兄会出席して帰つたのが十一時ごろだったと思ひます。四、五人の人を残すのみで、ほとんどの人は帰つたあとでした。

それからが大変です。翌日は朝六時に宮古支庁の庭に集合となつていたから、寝るどころではない。大急ぎで荷造りをはじめました。午前の二時ごろまでかかつてようやく終りました。しかし六時集合となれば四時には起きなければならない。二時間だけでも寝ようと私は寝ました。花嫁はどうとう一睡もせずに、四時とび起きた私と一緒にまた出発準備をはじめました。六時に集合して、それから乗船しました。八月十八日の朝でした。

当時家内は平一校に勤務していたが、さいわい平一校の学童疎開と一緒に行くことになつていきました。本船までハシケで行つたが超満員です。平二校の生徒だけは掌握していたが、平一校の方はすつと反対側で話ををする機会も全然ない。本船にうつつてから、学童のほか一般の疎開者も乗り何隻か船団をくんで出発したが、その日には出なかつたと思います。那覇港には夜入つたが、沖泊りのままで泊しました。そのとき宮古から出張したまま船がなくて那覇に滞在していた当銘由金視学が激励に来てくれました。那覇で船団をくみ

寒さをしのぎ、自給自足はかる

数時間後には鹿児島に上陸、城山の中腹の鶴鳴館という旅館に入りました。何十畳という広い座敷を開放して荷物を並べ、班ごとにかこんでやすみました。平一校、下地校もみんな宮古を出るときから一緒に。三日ぐらい泊つたと思う。家内は引率というより寮母といふことだつたとおぼえています。

それから宮崎へ行きました。行く先が小林だというのは鹿児島で

わかつたと思います。

小林ではつぎはぎだらけではあつたが婦人会が布団をつくって待つていってくれました。宿舎は青年学校で、平一校と平二校は一つの教室、下地校は人数が多いので別に一教室。引率の教員のうち、ばかり夫婦は教室の片すみに小さな衝立をたてて住み、平一校（高里好之助教諭）と下地校（川満恵位教諭）は家族が一般疎開となつているから近くに別に家を借りて通勤みたいにして通つたり、子どもたちと泊つたりしていました。私は若いから常直のようにしていましたが、青年学校の校長がいろいろ心配してくれて、あとで二つある宿室のうち一つをあけてくれました。おかげで私たちも落ちつけるようになるし、児童の部屋も広くなるし、ついぶんたすかりました。青年学校は町から三〇〇メートルくらい郊外にあって、そこから町にある小林国民学校に通いました。子どもたちは富古にいたときと同じ学年に入り、引率の教員はそのまま教員として配置されました。

そのうち初めての冬がやつて来ました。非常に寒いけれども、子どもたちは着がえを買うこともできない。個人差はあるが小遣錢はみんな家から持つてきています。全部私が通帳みたいにあずかり、子どもたちにもそれぞれ手帳を持たして、いくら使つたとちゃんとメモするようにしていました。しかし衣類を買うほどの余裕はない。また國からの支給も食糧費ぐらいのもので衣料まではでない。敷布団もない。畳は敷いてあるけれども零下五度まで下るんだから、大変です。霜焼けはするし、子どもたちはびっこをひきながらの登校でした。低学年のなかには泣きたさのもいて上級生がおん

ぶして登校する。靴もないからわらぞうりを買って間にあわせる。あんまり寒いから子どもたちはいろいろくふうをする。男の子たちは夜ははだかになって布団にもぐる。「はだかになると寒いじゃないか」と言うと、くつついて寝るからお互いの体温でかえつてあつたまるとかと言つたりしてね。それに着物はシラミがわいて夜は眠れないんだね。仕切りはない。ただ区分されているだけで、そばには女生徒もいるけれど平気だね。夜中便所に立つときはまだかで飛んでいく。子どもたちはほんとに元氣がありました。

食糧は生徒と一緒に買いだしにいく。費用は國の補助がありました。配給は主食だけで、野菜などはない。学校から帰つた上級生をつれて、青年学校のリヤカーを借りて、およそ一キロ以上はなれた農家に買いにいく。ときには二キロもさきまで農家をたずね歩いて買ったものです。近所に沖縄から的一般疎開者がいて、富古の人もいたので、おねがいして炊事をやってもらいました。

子どもたちはみんな小林国民学校に入り、私は四年生を受けもつたが私の組には疎開の子はいませんでした。職員会も一緒に、給与も同じ。異和感はなく、むしろ親切でした。登校の場合は私が指揮をとつて歩調をそろえて集団登校でした。ほかの子どもたちは集団登校はしていなかったようです。

何しろ員数が三校で百人近いから野菜もつずかない。はじめは何かやつていたが経費も苦しくなる。経費の範囲内でとなるとどうしても子どもたちはひもじい思いをする。買い出しも遠くなるほどにきつい。子どもたちはやせていく。それでとうとう入数の多い下地校は自主的に宿舎をさがして分離していきました。これで少しは登校はしていなかったようです。

やりやすくなつたけれどもまた苦しい。そのうち今度は平一校が近くの国民学校の方にうつつていきました。その学校にはすでに中頭郡の仲西校など二校が入つていてがそこに合流していきました。結局青年学校に最後まで残つたのは平二校だけ。それから一人で運営するようになりました。

ちょうどそのころから、これは長期にわたりそうだと考えるようになりました。いろいろくふうしなければいかんと考え、食糧不足をおぎなうためにもサツマ芋をつくることにしました。畑は近くの農家で出征兵士がいて女子だけで荒れるにまかせてある二~三キロ離れたところにあるところを提供してくれました。二反くらい。農具についてもあつちこつち農家を歩いて使い古しを貸してくれるようにいうけど、農家にはそんな余分はない。とうとう青年学校の校長に実情をはなして援助を訴えました。よく理解してくれて農具もモッコも使いなさいと言つてくれました。それから毎週土曜には子どもと一緒に畑に通いました。徒步で、軍歌をうたいながら、よく白虎隊の歌をうたわせました。非常にきついけれど子どもたちばのしそうでした。

いっぱい茂つていた雑草は引きぬいて綠肥につかい、苗はあちこちからもらつて来て植えました。芋がつくころになると、飯ごうを持って出かけ、間掘りをして炊いて食べる。帰りはみんなで歌をうたいながら帰るのです。収穫のときは、食べるだけではもつたいないと、水あめ工場におねがいして交換してもらつたりして糖分の補給をしました。

芋を収穫し終えたときははちょうど秋で、こんどは麦をまきました

た。麦は子どもたちがかねて落穂拾いで集めたものが一斗くらいあつたのを使いました。麦踏みもやつて、十センチくらいのびたころ、昭和三十一年一月でしたが宮崎県庁から帰還の指示がきました。そこでこれまで小作もとらずただで畑を貸してくれた農家の奥さんに、借り貸もあげられないでこれだけに成長している麦を収穫してくださいと言つたら、向うもよろこんでくれた。

野菜の自給も考えた。しかし野菜は芋とちがつて遠くではつくれないから町長におねがいして、青年学校から町にいたる、およそ三百メートルくらいのあいだで、本道からはなれた一間半くらいの農道の脇三尺くらいのところで野菜づくりをみとめてもらいました。

町長ははじめ取りあわなかつたが、いろいろわれわれの苦しい事情や計画を聞いて納得してくれました。ホーレン草などもつくつて、食べきれんというわけじゃないが一般疎開の人たちにわけてよろこばれたりしました。

肉類の不足は馬肉を買っておぎなつたりしたが、日曜日などみんなで川にいって魚釣りをして補給しました。小指くらいの小さな魚だつたが、みんなでくふうして生活をしました。

四十日間赤痢とたたかう

下地校や平一校が出たあと赤痢が発生しました。青年学校の一部を野戰病院みたいに一時軍が使用したことがありました。それが引揚げて間もなく六年生の男の子二人が赤痢にかかったのです。人の子をあざかつて大変なことになつたと思いました。小林には病院はあるにはあるが遠いし、ほとんど配給がないとかで薬がない。そこ

で渡り廊下をへだてて一番便所に近い廊下を仕切つて疊二枚を敷き、そこに二人を隔離しました。何しろ集団生活ですから万一人間に蔓延したらどうなるか、非常な緊張状態がつづきました。まず第一に二人の生命を守る、第二に蔓延させない、この二点にしづつてがんばりました。みているままでどんどんくだす。衣類も毎日汚れる。毎日洗濯しなければならない。家内は炊事をしているから病人の世話をさせるわけにいかない。家内にはオカユだけをつくつてもらつて、洗濯は一切ぼくがやるからといって、がんばりました。

洗濯は毎日校舎のうしろに穴を掘つてやり、污水も消毒水もそこに捨てました。さいわい火山灰だから掘りやすい。水は近くの小川から汲んできました。洗濯がすんだら、誰にもわからんように穴をうめる。毎晩穴を掘つて洗濯しては埋める、これを四十日間つづけました。それにチリ紙が間にあわない。これについては職員会で泣いて訴えました。生徒の家から古新聞、古雑誌、とにかく何でもいいから集めてくれといいました。みんな同情してくれてどんどん集まりました。それが一日に何冊もなくなつていく。食べものも制限するから二人の子どもは骨と皮みたいにやせこけていました。開業医には薬はない。それで近くにいた軍に実情を訴えたら、軍医を一人つけてくれました。それからは毎日軍医がきて注射をしたり湯タントンをしてくれたりいろいろやつてくれました。

子どもはただやせていくばかりでなく、睾丸も足も水ぶくれして、これは非常に危険だと思いました。父兄に知らせることもできないし、勿論通信の方もありませんでした。およそ四十日間、ぼくはこの二人を死なしてしまつたら、ぼくも生きてはおれない、死

んでおわびしなきやいかん、こんな悲惨な気持のあけくれでした。かかるのも一緒だったが、さいわい二人ともほとんど同じ状態でおつてくれて、命拾いをしました。二人ともまじめな子で、ほんとによく我慢して注意を守つてくれました。あとのはなしだが、庭のいちじくの木に実がなつてあるところからよくみえる。ほしくてほしくてたまらなかつたそうだが、我慢をしたということでした。

食べものを貰つて行方不明に

一人の男の子が行方不明になりました。ひもじいものだからあちこち食物をもらつて歩く。疎開の子だとすぐわかるものだからみんな同情してくれるわけです。くせがついてしまつてあちこち歩くようになる。盗みはしない。もううだけです。そのうち行方不明になつてしましました。

一度は、疎開の子らしいのが来ていたとの電話があつたから、上級生をつれて行つてつれ帰つたこともあります。またときには一晩帰つてこない。二晩めぐらいだつたか、どこをさがしてもみつからない。生きておればいいがと気が気じゃない。

そうしているうちに四キロも離れた学校の宿直の先生から電話がかかってきました。疎開の子らしいのが寒そうにふるえてうろうろしていると、懐中電灯もないから家内と二人ランプをもつて行つてみたら、本人は宿直室でぐうぐう寝ている。この野郎と思つたり、ホッとしたりですね。

てようやく宮古のことがわかつてきました。

敗戦のものは「玉音」放送で知りました。みんな一緒に青年学校の庭で聞きました。国民学校に行つてみたら、みんな動搖混乱状態です。その日ではなかつたと思うが、鮫島という男の先生は自分が持つていた図書をストーブに燃やしながら泣いていました。

昭和二十一年一月、帰還の指示が出来ました。だれもむかえには来ませんでした。鹿児島に集結するという指示で、山形屋か高島屋の前に集つたが、平一校、下地校それに仲西校も一緒だったと思います。一面焼野が原でコンクリートの骨だけが残っている焼跡にみんなムシロを敷いてごろごろしていた。われわれもそこに四、五日いたと思います。鹿児島を発つて沖縄の久場崎に着き、それから宮古に帰つてきました。二十人全員ぶじにつれて帰りました。

情報入らず自活の道を考える

小林はあまり空襲はうけなかつたが、駆はよく機銃掃射されました。またB29はしおちゅう上空を通り、都城が爆撃される音はよく聞こえきました。それで裏山に生徒と一緒に防空壕を掘つて、空襲警報がかかると全部そこに入りました。

沖縄の情報はあまり入りませんでした。十・十空襲についてほとんど全滅状態だということはわかつていましたが、沖縄戦のころは確かに情報は入らない。せいぜいラジオ放送いで、敵が上陸して激戦がつづいているということぐらいです。

子どもたちの動揺はほげしかつたが、宮古には上陸していないことで幾分安心はしていました。しかし一般の民衆は、沖縄の次ぎは宮崎、鹿児島あたりだろうといつて危機感にあふれ、非常に緊張していましたね。疎開してから終戦までの一か年間は何の連絡もなく、まったくの孤立無援でした。

そこで私は覚悟を決めました。そのうち疎開集団も解散になり、国の援助や補助もなくなるだろう。いつまでも青年学校のお世話にしていました。六年生だった子は小林中学校に四人、女学校に一人進学していました。学費は子どもの小遣いからだしていたが、最悪の場合を想定して、自活の道を講じなければならない。いろいろ計画をたてました。国有林を借りて開墾していくことも考えました。戦争が長引いて帰れないということもあるが、国自身がどうなるかわからないから。戦争が終つた段階でも沖縄の状況は全然わかりませんでした。大分あとになって密航できた人や、校長がたずねてき

3 学徒動員

宮中鉄血勤皇隊

多良間村字塩川 垣 花 義 夫（十四歳）

鉄血勤皇隊に召集される

昭和十八年四月、多良間国民学校から宮古中学に入学しました。そのころ軍事訓練はあったが、翌十九年には鉄血勤皇隊に編成され、ザラソキの通信隊に配置されました。

二年生だけで百人近くはいたように思います。教科の勉強はな

く、無線と有線の二班に分けられて、歩兵操典や戦陣訓なんかを教えられました。通信といつてもかたちはかりで、有線の方は送話器をかつぎ直接線をひいてやりました。至って近距離で連絡できるかどうかの訓練。無線はモールスと手旗信号をやりました。指導には宮中の教官もあつたが、教官も軍の指揮下に入っていたように思います。兵隊と一緒に通信隊の兵舎に住みこんでいました。生徒は学校にいたときのように平良から通うものもいたが、久松から歩いてくるのもいました。なかにはザラツキの兵舎(壕)に起居するのもいました。確か石垣小太郎さんのうしろの嶺の下あたりにトンネルを掘ってありました。松の丸太で天井を支え、床板をはつていました。われわれが行つてからもさうに掘り、広げたので相当数の人

が入っていました。

起床は兵隊と一緒に、起床ラッパで起こされました。生徒は、島尻勝太郎先生など宮中の教官によつて整列させられ、そのあとで部隊に連絡をとる。そこへ指揮官がやってきてその日の日程を説明する。ほとんど作業と通信訓練。無線組は午前中モールス訓練をうけ

ると、午後はザラツキ周辺から、西城校の西側近くまで防空壕掘り。四人で一つぐらいずつタコツボ壕を掘つたと思います。

学校が事実上ザラツキに移つてしまつたために、宮中の寄宿舎ではまかなえなくなり、出身地別に民家をかりて寮住いするのも出てきました。多良間寮は東仲の高田という人の家でした。

多良間寮にいるころ、朝八時から九時ごろであつたか、羽を真四角に切つた見なれない四機編隊がいきなり飛んできました。見なれた友軍機とはちがう。おかしいなと思つてゐるうちに急降下してバリ

バリバリとやつている。ははあ、演習をやつてゐるんだ、空砲なんだなと思つていたらサイレンが鳴りはじめました。敵機の初空襲です。それまでにはすでに演習と思つて屋根にのぼるもの、福木にのぼるものありで、手をふつたりしていたのです。私もタオルを持つて々友軍機がんばれ!と叫びました。空砲だと思つていたら、機銃弾があたりにブツツ、ブツツと音をたてて飛んでくる。

低空してくる翼には星マークがみえる。大変だ、敵機だと思ってからサイレンは鳴りだしたのです。防空壕に二時間ばかりいて、敵機が遠ざかつたのを見すまして出でたら、轟きょうがそらじゅう散つてました。ここでは危いということで寮生全員といつても十

名いたかな、炊事のおばさんをつれてスカガー(白明井)に避難することにしました。みんなで手をとりあって石垣をとび、畑をこえて竜舌蘭の茂みをはうようにして避難したが、去つたはずの敵機が引き返してきてまた機銃掃射する。百メートルそこらの距離なのに、一時間半あまりもかかつてやつとスカガーにたどりついたものです。いつもは毎朝登校まえに二回も水汲みに通つているところなのに、一時間半もかかりました。空襲警報が解除されて出てきましたら、あたりはもうん暮れ、太陽が西に沈みかけるころでした。平良の中心部はあちこち燃えており、それから何日も燃えつづけていました。三、四日は燃えていたよう思います。

それから一週間ほどして多良間寮を引きはらい、ザラツキに近い城辺町の長中に引越しました。長中では一か月二十五円の下宿料をはらいました。まだ平良から通つ生徒もいたから、空襲がはげしくて平良に帰れないときは一緒にザラツキの防空壕にとまることもあります。島袋常夫さんは一足さきに多良間へ逃げ帰りました。

りました。

私たちもザラツキでは二等兵ということだったが、べつに星はなくて軍服や靴も支給されませんでした。給与もなくて毎日訓練と壕掘りばかりしていました。ひまなときは銅線の外皮をはずして銅線をぬきとり、鎖をつくたりしてあき籠やナイフをつるすものにしたりするのが、楽しみといえばのしみでした。兵隊が直接生徒を殴ることはなかつたが、上官にぶたれた兵隊が気ばらしに気合を入れたりすることはありました。「気をつけ」「まわれ右」とか言つてやられたが、たたくことはなかつた。しかし教官が殴られることはありました。生徒を許可なく帰したといって、翌日生徒の前で教官が指揮刀で殴つたり、編上靴で蹴とばしたり、大変なものでした。指揮官といつても少尉か中尉。生徒の場合集団で殴られることはなかつたが、個人的にはビンタをはられたのもいました。

通つてゐる生徒は弁当を持参していたが、ある期間屋食だけはだしてくれたことがあります。玄米に汁は芋ヅル。軍馬が倒れると馬肉が出たりしました。食事ははじめバケツにとつて飯ごうに分けて食べたが、数か月の間に一人分だった飯ごう飯が一人、三人、四人で分けて食べるようになつていきました。汁は飯ごうの蓋一ぱい。

戦争がはげしくなつて家からの送金もとまり、下宿料もはえなくなりました。ザラツキの部隊から帰えると馬の草刈りをしたり福音の海岸近くの田んぼで草とりをしたり、下男奉公のようなかつこになつてしましました。戦後になつて二か月分くらい下宿料をはらいに行つています。

「非国民」と言われても逃げ帰れる

戦争中は二回多良間に逃げ帰りました。

一回めは昭和十九年の暮れ。十・十空襲で多良間もやられていました。ちよどく桟橋をうろうろしていたら多良間行きの船が出来ました。栗国造船所の船で軍が徴用して乗組員はみんな兵隊でした。何でも多良間の応召兵を乗せに行くんだと言つていたが、このときは別にとがめられることもなく行き、一週間ほどで帰つてきました。

二回めは年あけて五月ごろ、艦砲射撃のあつた直後でした。艦隊は南から来たのだから台湾も八重山もやられ、多良間もやられていました。ちよどく桟橋をうろうろしてたら多良間行きの船が出来ました。まだ兵隊たちが近くに敵の上陸があるかもしれないとはなしてゐるのも聞きました。敵が上陸すればこんな小さな宮古島や多良間島はもうひとたまりもない。生きている間にもう一度親兄弟に会つておきたい、そんな気持もありました。

島袋常夫さんは一足さきに多良間へ逃げ帰っていました。私たち

七人ばかり一緒に脇過ぎ部隊から逃げて平良へ向いました。知念長助さんは四十度近い熱でうなつていていたのに小さな風呂敷包みつもつて逃げました。近く多良間行きの船が出ると聞いていたので平良で待機して飛び乗る計画でした。平良であちこち隠れてしまつたのに、六人は追つかけてきた与儀達敏先生や諒久村寛仁先生につかまつてしましました。「お前らは非国民だ、逃げたら許さん」と言われてつれもどされました。ぼく一人逃げおおせたけれども船は夜し

か出ない。ようやく飛び乗って隠れていても空襲で延期。ときには出港してこれで帰れると思っていると伊良部の沖で空襲にぶつかり伊良部の港で一夜あかして翌朝はむなしく平良へ帰つてくる。こんなことも数回はありました。延期のたびに日中は平良のまちをあちこち隠れてもわり、出港ときいては夕方第二桟橋に行つて飛びのる。長間を逃げてからおよそ一ヶ月、二十回くらいも出なおしましたらうか。多くは親戚の家を転々としていた。その間にも与儀先生や譜久村先生は馬に乗つてさがしまわっていた。ある時はせつかく飛び乗つたのに兵隊にみつけられておさされたこともあります。ロープをはずして岸をはなれた瞬間に飛びのり、機関室に隠れるのです。そのころは伊良部や多良間通いの定期船はみな軍に徵用されていました。このとき乗つたのも軍に徵用された粟国造船所の船で、乗組員はすべて兵隊。一般の人は乗せなかつた。機関長も兵隊で、出港してからは別に文句は言いませんでした。そればかりかその機関長は「多良間で葉たばこを手に入れてくるなら、かくまつてやるう」という。「兵隊さんが満足するまであげる」といつて、機関室に隠してもらつた。それから機関長が前もつてみつからないように機関室にかくまつてくれたのでぶじ多良間に渡ることができました。

機関長は多良間におりると同時に、さあ約束をはたせ、という。一緒に私の家までついてきた。親父にわけをはなして葉たばこを二斤くらいあげた。あのころ何處でもたばこがなくて、イチゴの葉や松葉を吸つていたが、多良間はもともと専売制から除外されていて、村内だけで消費する条件で葉たばこを栽培していたので、不自然に違ひないと思ひます。

だと思います。

もちろん兵隊のすべてが時計を手ばなしのがつっていたわけではない。なかには復員にさいして桟橋に向つている兵隊に「兵隊さん、時計を買いますよ」といった中学生が、「何をいつているか、このチャンコロども」といつて足蹴にされる場面を何どかみてています。クチャンコロタといふことばはザラツキの部隊にいるときにもよく耳にしました。多良間でも父の家に寄宿していた兵隊がやはりクチャンコロタといつて父と激論をしたことがありました。クチャンコロタよばわりが、中國人という意味で使つたかどうかはわからいませんが、沖縄県人を馬鹿にした、差別感とともにづくものであつたことは間違ひないと思ひます。

学徒動員

平良町東仲

池間和子（十八歳）

とても单调な生活だつたし、もう大分なりますので、これといつてお話しする記憶に残る話もありませんが、想い出されるままにお話しておきましよう。

疎開に行けなかつたこと

始が、集団疎開学童と一緒に九州の方に出かけることになつたとき（十九年の八月）、私も同行することにしていましたが、都合があつて、とりやめになりました。

由はなかつたようです。この兵隊は軍曹でカワイという名でした。戦後私が平良へもどつていると、復員前にわざわざ下宿さきに訪ねてきて車刀や背のう、手袋などをお礼だといつてくれました。

進駐軍相手に物々交換

終戦は多良間で聞きました。だれにきかされたのかはつきりしません。たぶん平良からきた人に聞いたと思うが、だいぶ経過してからだと思います。戦争は終つていたのにぼくらは飛行機の爆音をきくたびに逃げまわつていたのか、というはなしがあったことをおぼえています。

それから一ヶ月ほどして平良へ帰つてきました。進駐軍による軍政はまだしかれておらず、軍もいるにはいたが、進駐軍のJSTが時々桟橋にきてジープが市内をまわつたりしていました。宮中には平良に帰ると同時に復学しました。逃げた当時は復学させないというはなしが聞こえていたが、戦争に負けたので許すのだといって文句なしに入れてくれました。

復員が始つたころ、進駐軍は、日本の兵隊の時計などをとりあげるそうちだとのうわざが広まつていました。そのせいかどうか、兵隊は時計でも何でもくれたり売つたりしたもの。ぼくもそうとう一個百円で時計を買い、アメリカたばこと交換しました。百円の時計がたばこ一ボルにばけ、二五〇～三〇〇円で売れました。五百円で手ばなす兵隊もいたから、おもしろいようにもうかりました。アメリカ兵は時計のほか日本刀、日の丸、帽子、日本兵のもちのなら何でも交換したがつてきました。國へのみやげにしたかったの

その後にまた、今度は台湾の方へ疎開しようとしました。ところが、これもだめになつてしまつました。その頃は、どんどん疎開する人が増えてきていて、そのためでしょうか、今まで奨励していたのをやめてしまつたのです。

受持ちの先生の処へ頼みに行つたのですが、学校はもう証明を発行しなくなつていました。証明をもつていかないと、疎開先に行つても、学校に入れてもらえない。そういうことで、断念させられてしまつた。

これはあとになつてわかつたことですが、証明をもらわないで、学校はもうやめる積りで台湾に行つた方々が、非常時天下だというので、証明なしで編入させてもらつたそうですね。

従軍看護婦の見習

昭和十九年には、私は、沖縄県立宮古高等女学校の四年生でした。五十六人の同学年生のいく分かは疎開し、残つた者は、三年生

と一しょに、陸軍病院の方に配属されました。十人程の班に分かれて、分宿して、病院に通いました。いくらかの給金をもらいましたのを家賃にしたとおぼえています。私たちの班は、病院のある鏡原小学校から、丘一つ北にいつた盛加の部落で、そここの民家に宿泊しました。病院での勤務は大体八時から五時まで。勤務が終つたあとは、それは普通の女学校の寄宿舎生活といつたものでしたでしょう。

二十年の三月になると卒業ということでしょう。卒業の時も、病院でした。別に集まつて式をするという状況ではありません。受持

ちの先生が、本人をたずねてきて、ザラ紙にすつた卒業証書を手渡してくれました。

卒業したからといって、別に変ったことはありませんでした。はげしくなった空襲の中で、あいかわらず、従軍看護婦の見習いとしての日常が続きました。

外科、内科、薬務科と分れてそれぞれ勤務しましたが、内科の方に行つた私などは、別に白衣を着せられるのでもなく、女学校の制服のセーラー服で過ごしていました。

陸軍病院の方たちはわりと親切にしてくれましたので、苦労しているという気持ちは別にありません。看護さんの手伝いで、静脈注射などをしていました。

病人の中には、高熱のために、神経をいためたのでしよう、大声でわめく人もでていました。そんな人は、別の病棟に移されました。私たちも手当をもらっていましたが、一部は貯金させられました。軍の手伝いをすることは当り前のことだと考えていましたし、金の必要も感じていませんでした。

食事の方は、軍から支給されて、全く同じものでした。私の方は、父母が疎開しないでいましたので、勤務がひけたあと、ときどき町の中のうちの方に行きました。たのしいときといえば、そのときだけでした。アフラ味噌やカツオブシ、それにユニク(麦粉)をうちから補給しました。このような保存食がありましたし、女の子ですから、特にひもじい思いをした記憶はありません。

うちにかえることはたのしみでしたが、宿舎にもどるときに空襲にあうこともありました。石垣のよこなどにかくれて難を避けまし

た。飛行場の方をねらつてきて、機銃をうります。私のかくれている側にパラパラとふつてくるのは、だいたい、うちがらの漁きようでした。

垣花美恵子さんと本村マサさんは、私の同級生で、同じ鏡原の病院に勤務していましたが、別の班に属していました。二人の班は、病院のすぐ近くでしたが、水の便のよくない処でした。

その日は、二人は、班の水ぐみ当番でした。私たちの宿舎のある盛加部落の井戸水をくみに行き、宿舎にかえってきたときでした。その時刻には、私たちはもう勤務についていましたが、いつものように朝の空襲がやつてきました。突然、大きな爆裂音がしました。方向が、彼女たちの宿舎の方でしたので、みんなでかけつけました。

ちょうど水をくんできて宿舎に入るときだったようです。二人とも百メートルほどもとばされました。ガラクタと石ころの中でもつかりました。

美恵子さんは、意識ははっきりしていて、マサさんの身の上を察していました。マサさんは頭を強くうつたのでしょうか、意識不明のままでした。見た瞬間、これはこときれたな、と思いました。病院の人が、壕の中の病室の方にかつぎこみました。

マサさんは数日後意識は回復して、今は幸福な生活を送っています。一方の美恵子さんは脊柱をやられたんですね。ささえるとすれば、何とかなります。不幸にも、下半身不自由で、その後、数

年、亡くなるまで病床におりました。

美恵子さんは、軍属としてはみなされていません。終戦後結成された傷い軍人会に入っていましたが、役所は軍属として認めていません。

このようなことはありましたが、普通の場合、陸軍病院は安全な方でした。それでも、その後も、病院に爆弾がおち、看護兵がやられるということもありました。重症の方々は、前もって、防空壕の中の病室にうつしてありました。

病人たちはほんとにみじめな姿でした。病気の上に、大量にしらみが発生して、それでもがき苦しんでいました。

私たちの場合は、そういうと変にきこえるでしょうか、たいへん落着いていたように思います。敵が上陸してくるという話をきいても、心の動揺はありませんでした。それにひきかえ、兵たたちは大分、動揺の色を示していました。

終戦のときの特別放送を、運動場に集められてきかされました。でもラジオはガーガーするだけで、うしろの方に並んだ私たちの方には、何が何だかわかりません。でも、前方からのささやきが伝わってきて、敗戦を知りました。泣けて、泣けて、きました。

中学生の戦争体験

平良町下里 池 間 俊 夫 (十四歳)

昭和十八年四月、県立宮古中等学校に入学しました。制服はカ一

キ一色、ゲートルを巻き、帽子も戦闘帽です。兵隊の卵みたいな服装でした。上級生達は時代が軍国主義一色にぬりつぶされる前の、本来宮古中学校の制服であった「霜降り」色の制眼の頃を知っている世代がいました。

五年生グループで、当時は本屋には売っていない部厚い本をひろげて、軍縮會議について論じあっていたのがいました。学校帰りによく立ちよつた平良竜造さんの家がたまり場になつていて、大きな活字で国際連盟に於ける各國代表の発言などの内容があつた事を覚えてています。

富國強兵策のため、軍備はどんどん拡張されるものであり、これは至つてあたりまえの事と学校の講義にも聞いていたが、軍縮を論じ合うとは、これは變ったグループだと思っていました。

当時、宮古中学に神田幸雄と云う配属将校がいました。六師団長の任命といつて校長より権威がある様子でした。巾の広い革のベルトをしめ、その下には腹巻きをのぞかせて、胸を張り過ぎて腹をつき出した様な最大限のそつくり返りかたで歩いていました。

職員室の掃除当番の時、神田中尉のいつもさがっているサーベルが立てかけてあったので抜いて見ようとしたが力いっぱい引いても抜けなかった。生徒をひっぱたくためにサーベルの襷があつちこちひつこんでいるのです。入学早々、教練の時間に私も頭にコブが出来るまでそのサーベルでたたかれた事があるし、高学年の生徒は両手に持つた二ふりのサーベルでめちゃくちゃになぐられたりしていました。

一般教課の授業が減らされ、軍事教課の時間が増えて行きました。

た。下級生は木銃、上級生は本物の小銃を使って戦闘演習をしました。夜間の外出禁止、集会をもつたで重ければ退学、軽くても説

論処分は受けると云う重苦しい中学生の生活が強制されていた。運動会も一般体育よりも戦闘演習が大きな行事の一つだったし、兵隊

の恰好した中学生たちに真人形を銃剣で突かし、運動場が小さな戦

場を思わせる様な硝煙の臭いが立ちこめていました。十一期卒の生

徒たちは、運動会の終了後、慰労会をカママ儀でもったというだけ

で、それが処分問題になり、不満を爆発させた生徒たちがストライキを起こして学校を包囲し、抗議する中で、抜刀した配属将校が、白刃をふりまわして生徒を追いかけまわすという事件が起きていました。

十二期の生徒の中には、サーベルでなぐりつけるだけではなく、木銃で突き倒して気絶させるなど、神田中尉の人を人とも思わない方で、銃器庫の銃前をこわして、中にあった三八式歩兵銃や刀剣類を盗み出し、彼への報復が計画されるという事件が起きました。昭和十八年八月の事です。事が表沙汰になるのをおそれ乍らも、学校当局は、とうとう警察へ通報したのです。

反抗しそうな生徒たちが呼び出され、その中の或る生徒は二十五日間も留置されて取調べを受けています。

全校生徒に総口令が出て、その事件にふれる事がタブーになつてゐるうちに、何名かの生徒たちが、学校から姿を消して行きました。

退学処分になった生徒の中には、中学四年生終了の成績証明だけでは就職にも支障をきたし、沖仲仕をして肩にコブが出来るまで働

いたり、トバシ（灯油代りに細く割った樹脂を含んだ松木）を売つたりしていた人がいたが、その後台湾に渡つて行った。

下地勇の場合、退学させられた後、改名していましたが、神経衰弱が昂じて発狂し、六尺棒をふりまわして道を歩いていました。その後、座敷牢の中にとじこめられ、戦後間もなく二十代の若さでなくなりました。

昭和十九年四月、二年生になって一般教課の授業はほとんどなくなりました。軍事教練のない日は農業の時間が主となり、五月になると、海軍飛行場の作業に勤員され、続いて下地の陸軍飛行場作りにかり出されました。そこについたはずの農家はすでにこわされて撤去させられていたし、屋敷あとの石垣をくすす作業から始まり、モッコで低地にある指定された畑へ、石運びをしました。

昭和十九年六月、宮古島に日本軍混成旅団の進駐が始まり、宮古神社の下の坂道に、戦車がずらりと並びました。船団から陸揚げされてくる戦車に乾いた泥がへばりつき、いかにも戦塵にまみれて来たという感じです。いよいよ宮古も戦場になるという予感を覚えました。

学校は校舎ごと海軍に接収され、毎日、飛行場の石運び作業の日が続いているうち、五人程指名して、作業を止めて勉強しようと云われました。一高から東大へと夢見ていましたが、幼年学校を受験しろと云うのです。

七月になって、神田中尉が熊本県へ転勤する事になり、私を含め三人の生徒を連れて行くと、熊本で幼年学校を受験させると云い出ました。

しました。

その頃、疎開児童を乗せた船が魚雷を受けて沈没したと云う噂が、町中に囁かれる様になりました。家族と別れて一人で熊本へ行くのは止めたと思い、八月になり、急挺台灣へ家族ごと疎開する事になりました。

台灣の台中、第二中学校に転校し、そこでは、まともな普通学課の授業を二年生の三学期まで受け事が出来ました。

昭和二十年四月。上級生は学徒動員を受けて学校からいなくなったり、三年生の私たちが最上級生となりましたが、間もなく私たちにも学徒勤務隊として動員令が来ました。クラスを半分に分け、半数の者は陸軍歩兵二等兵として入隊し、残り半数は飛行場作業に動員されました。私は台中軍司令部の高射砲陣地に配置されましたが、しばらくすると、全員が飛行場作業にまわされました。

初めのうちは空襲があつても、午前中は整地作業をする事が出来たのですが、そのうち、作業開始後、三十分もたたないうち、空襲を受ける様になりました。逃げられるだけ滑走路から逃げて二キロぐらい走り続けた頃、さっきまで作業をしていた場所に爆弾が落ちるのです。もう、日中は作業が出来なくなり、夕方、空襲が止んでから作業を始める事になつたのですが、過労と栄養失調からクラス五十名のうち、三十名がマラリアに罹り、親もと帰されました。人数が減った分だけ食事の量は増えました。そして、その分だけ、作業の分量も増えたのです。台湾の暑さと、作業の疲れでへとへとなり、いつそマラリアにでもかかった方が良い、と考えているう

ちに作業の途中、急にぞくぞくと寒気がしたのです。これはマラリアだ。やっと家族の所へ帰れると思ったが、その日の夕方、作業隊解散の命令が出ました。その日のうちに馬車に荷物を積み、飛行場を引揚げる事になった。発熱にうめきながら学校までたどりつきました。台中の家族の疎開地までは遠いし学校から四キロ程の所に伯父の家族が疎開して来ている事を知っていました。ふらふらしながら近道を通ってそこにたどりつき、水でじゃあじゃあ頭を冷して倒れる様に寝込んでしまいました。保里から母が迎えに来て、親もとで病気を養う生活が続きました。

二十年八月一日。入隊のための召集令状が来ました。十五歳の時です。マラリアの熱はまだ続き、やせ細って歩行にも目まいがする状態です。八月一日に入隊しませんでした。十日後、保里の憲兵隊から出頭命令が来ました。父に支えられるようにして憲兵隊まで行きました。兵役拒否だとどなりつけるので、高熱で動けない状態にあった事を説明すると、這つても入隊すべきだと云うのです。兵役拒否は断つても良い事になつていると、日本刀を抜き二人庭先きに並べと云うのです。ソ連が昨日参戦し、日本人は天皇のため戦つて死ぬべきだのに何事かと云うのです。ピカピカ光る日本刀を目の前につきつけられ、ほんとに殺されると思ったが、「高い熱があるのに、入隊したら、隊で病気を悪くするだけで、隊に面倒をかける事になるではないか」と反問したのです。にらみつけていた憲兵が刀をおさめました。改めて召集令状を出す。その時は絶対に行けといわれ、二時間ばかり、父と二人でさんざんにしほられ、おどされました。それから二日後、八月二十日に入隊せよと改めて召集令状

が来ました。だが、八月十五日には敗戦、弱った体で入隊せずにすみました。

九月になって、磯開地を引揚げる事になった。富古島は空襲を受け全滅状態だと云われていた。台湾は長い日本の植民地統治の不満があつて日本人が襲撃されているという話が伝わっていた。治安が乱れ、家族八人、官古まで無事帰れるという保障もない。乗船キップ代を残して父は有り金はたいて、米と煙草の葉を買って来ました。小学生だった弟たちのリュックにも米を少しづつ分け入れ、若し家族が途中でばらばらに別れる事があつても、それを喰つて生きのびられる様にした。

が出港するという報らせがありました。乗船チケットを買ひに行きました。その帰り途、暗い橋の上で、行く手をさえぎり何やら分らぬ言葉でどなるのです。

よく見ると大男が鎧剣をつきつけている。『渡るな』と云つているらしい。戻る道には海しかないしそこをはなれてしばらくたたずんでいると、台湾人が来ました。その人と一緒なら、その人の子供と思つて通すだらうと走りよつて一緒に歩き出すとその人も追い返される。心細くなつて、河沿いの道を上流の方へ歩きました。二つの橋も歩哨がたつています。橋と橋の間隔はだいぶあるし、どこか泳いで渡れる所があるはずと考へながらテクテク歩き続けました。三つ目の橋に歩哨がない。見とがめられぬうちにそこをサッかと渡り、今来た道の対岸を逆もどりして夜ふけてから家族の所へ戻

て京を、鶴居もたとねられた帰郷した。して死んでしまった木暮の隣の女
舎まで行き、荒り歩きました。本屋など全くなく、読む本が一冊もな
かったその頃、そこの兵隊が「レ・ミゼラブル」という本を一冊與
れました。表の方は二十ページ程なくなっていたが、むきばる様に
読みました。昭和二十年十月の事です。

はあとかたもなくなつた料亭の屋敷跡の一角に小屋を立てる事になりました。製材所から板の切れはしをもらつて来て、壁と床を作りました。隙間だらけでしたが、そこが私の勉強部屋となりました。

海岸に放置された特攻隊用舟艇の舵取り紐の滑車をはずして来て、木箱にとりつけ、小さな手押し車を作りました。そちら中散乱した瓦礫の山を片づけるのに役立ちました。

女
学
校

宮古高女 狩 侯 ウメ(十七歳)

ソバ嶺の子どもの死

こちらからたずねていて、兵隊にとられた兄と面会することは自由でした。一度か二度でしたか、ひもじいといって、夜半にうちへ来たこともあつたが、向うから外に出ることは普通にはできないうござでした。

兄がソバ嶺にいた頃、面会に行つたことがあります。途中では、小学五、六年生位の子ども二人が死んでいくのをみました。

通学はそれこそ生命がけでしたが家の方は安全でした。空襲は、太陽の方向からきて、私たちの部落（地盛）の上空で両方に分かれ、二つの飛行場を襲うのが普通でした。爆弾をおとすのは真上で見えるのですが、たまには斜めに飛行場の方へとんできます。艦砲射撃のときも、南の沖に黒い船がみえてうつてくるのを見ました。何でも防空壕に通べといそいでいると、たまには頭の上を音をたててとんでいきました。

うちちはほんとに安全だな、と思いました。衛生的にも恵まれていました。

通学はそれこそ生命がけでしたが家の方は安全でした。空襲は、太陽の方向からきて、私たちの部落（地盛）の上空で両方に分かれ、二つの飛行場を襲うのが普通でした。爆弾をおとすのは真上で、見えるのですが、たまには斜めに飛行場の方へとんでいきます。艦砲射撃のときも、南の沖に黒い船がみえてうつてくるのを見ました。何でも防空壕に運べといそいでいるが、たまには頭の上を音をたててとんでいきました。

うちちはほんとに安全だな、と思いました。衛生的にも恵まれていました。

不系強かおちでいるのをいたすらして
それから競争したとのこと
でした。息だけをしていました。

新編丁の通字

空襲がはじまつてから、授業をうけた記憶は全くありません。学校では、訓練か、防火訓練です。海軍飛行場が出来たので、道も遠まわりして通学しました。弁当をもつて。サイレンや、無電塔の赤旗が、空襲警報の合図でした。うちへひつかえしました。飛行機がきたので友軍かと思っていると、グラマンです。そうわかつてから空襲警報が発令されるということもありました。ひつかえしてうちへ向う途中、第二波が東の方からやつてきて、飛行場めがけて機銃掃射です。近くの原藩屋にかくれて難をまぬがれたこともあります。

台湾を出て二週間に宮古に辿りつきました。港から見る平良市は、海岸近くの家並が、ほとんど焼け落ち、殺伐とした風景に変っていました。からうじて空襲から焼け残った持ち家の貸屋には見られない人が住んでいました。ロケット弾で屋根に大きな穴がボッカリとありました。その家を半分あけてもらい、ようやく落着く事ができました。

父は宮古に帰つてからもすしづめの船の中では横になつて寝る事もできず長い船旅の疲れが加わつたせいか、マラリアを悪化させて寝込んでしまいました。母と手巻きの巻タバコを作り、十本ずつ糸

戦後の心配

戦争中、私のうちには、よく兵隊が出入りしました。たいがいきまつた兵隊で、それはもう「ものくう」主義でした。

兵隊がにわとりをもつてきて、これをたいてくれということもありました。うちでは山羊を屠つてどちらそうちしてあげました。中には、饅話をぬすんできてくれる人もいるにはいました。しかし、恩義もない軍曹もいました。

部落の隣りにいたのは年をとった人ばかりの部隊でした。よく留守家族の話をし、子どもが何名いるんだと話していました。

終戦のときは残念でしたが、よかつたという氣もしました。それより、これからどうなるかという心配の方が大きくなりました。

心配の一つに、しだいに兵隊たちの気が荒れていくのがありました。兵隊たちはやることがないのですから、どんなことをしだすかわからないということでした。

兵舎の払い下げも始まり、復員をする頃でしたね、とてもこわい目にあったのは。

伍長と兵長の二人でした。近くの「オジイ」部隊ではなく、若い人でした。畑からの帰りをねらっていたのです。陽のある時間でした。素面です。まちかまえていたのです。

そのとき、私は夢中で叫びました。

「私は学生です。学生です」と。

その声に相手は気をゆるめました。あやうい処で難をのがれ、私はうちへかけこみました。

うちの近くだったから助かったのだと思います。

畑の行きかえりは、こわくてたまりませんでした。

五、離島におけるもう一つの戦争

大神島

常駐する軍隊はいなかつたが、耕地面積の狭小から来る食糧事情は宮古本島よりもきびしく調理の仕方をあやまれば死につながる様な蘇鉄さえも不足して来る。

医療事情はきびしく民間療法に頼るだけで機銃弾による負傷者は宮古本島よりもきびしく調理の仕方をあやまれば死につながる様な蘇鉄さえも不足して来る。

浜辺に横たえ、海水で傷口を洗つてやる事が唯一の治療法となる。

軍事施設はなくともせまい島故に攻撃集中度は高く六十%の民衆が

焼失している。空襲による死亡者四名は当時の人口比から三十名に

一人の死者ということになる。

(友利恵勇)

島内の蘇鉄もなくなつて

大神島 久貝吉一 (二五歳)

昭和十九年十月十日、大神の西の海を通つて平良の港に軍の輸送船団が入港して行った。午前七時半ごろ、平良の飛行場や港の沖合と思われる所を米軍機が低空して行く。飛行場あたりから煙がまい上がる様子を見た。船が燃え出したらしく天をつくような黒い煙が

大神島からも手にとる様に見えた。空襲とはそんなものかと、めずらしくもあり、木の上に登つて見ていた。九機の飛行機が、タカが舞う様にぐるぐる輪を描きながら池間島、狩俣部落、島尻部落の上空に近づきました。そのうちの一機が編隊からはなれ大神島の方向へ近づいて来た。大神島は小さな島だし、陸地もないしこだけは安全だと思っていたのにここをもやるつもりだと、あわてて木からすべり落ちる様におりた。あつと云う間に飛行機は真近かにせまり、近くの石垣に身をかくすひまもない。近くにいた、ウブバーハの久貞金三(当時十七歳)がうめきながらおれた。飛行機が耳をつんざく様な音を残して島の上を通りすぎた。耳と眼をおおいその場に伏せ、気がつくと、背から血を吹き出した金三さんがもがいているのです。あわてて背の傷口から吹き出る血をとめようとしたが止らない。間もなく、ぐつたりして死んでしまった。部落中が大さわざとなり、浜辺に、魚網を干してあつたから、陣地の擬装と間違えたのだと云う事になり、その日から、網を干してはならないと云う事になつた。浜のくり舟には、カヤの葉をかぶせて、上空から見えない様にしたが、一度攻撃目標にされたせいか、沖縄本島への通路にあたるせいか、町を攻撃した飛行機は大神島も空襲した。結局、三十戸のうち、十二戸の家を残して、全部焼けてしましました。當時数少なかつた瓦ぶきの家で新築して三年しかならない辺土名さん

の家も焼けてしまつた。その長男の金次郎は小学五年生でしたが弾の破片が背中にあたり泣きわめく子を夜になると、召集令状が来ました。佐世保の海軍に入隊したのですが、そこで肋膜炎を患い除隊命令が出て、島に帰つて来て病氣を養つていました。

昭和十八年、体が弱かつた私は徴兵検査で丙種とかで一度は不合格になつたのですが、それでも戦争が激しくなると、召集令状が来ました。佐世保の海軍に入隊したのですが、そこで肋膜炎を患い除隊命令が出て、島に帰つて来て病氣を養つっていました。

根間屋のおばあさんは、孫の子守りをしている所を、いきなり飛んで来た空襲機におどろいて逃げまどい、男の子と女の子は機銃弾で即死、おばあさんは弾で大けがをしたのです。パイマーのおじいはロケット弾で死んでしまいました。狩俣の軍医の所は負傷した人々マラリア患者でいっぱいだとこの事で、とても手がまわらないとの事、さりとて、町の医者の所まで、けがした人々を運ぶにも往復の海上は空襲をさけて夜運ぶにしても、宮古本島に渡つてから、どうやって医者の所まで負傷者を運ぶのか、乗りものはないし夜があけたら途中の道はあるないとこの事で、結局、医者に診せる事も出来ず次々に死んで行きました。

空襲でけがした人もみじめでしたが、マラリアに患つた人も大変です。家を焼かれて、学校東側のカミカギ穴やナカスグ穴、その他岩かけ等に生活しているせいか、湿気とヤブ蚊にやられ、マラリアに患る人々がふえて行くのです。發熱と共にものすごいふるえを出すのです。ふとんらしいふとんもないまま、チヨチンガ(米俵の麻袋)をかぶせ、アダン葉むしろをかぶせるのですがふるえが止らず苦しみ通じでした。

戦争が激しくなる前は、大神島内にもイモは豊作していたしそれを分け合つて食糧にしていました。相次ぐ空襲で、甘藷の植付けも出来なくなりました。残り少ない甘藷を掘りに行って、伊佐松職さ

ん（当時五十五歳）はロケット弾でさきとばされました。島の裏側の煙でガラス掘りしていたのです。初めの低空飛行して来た時は、くわをほうり出して岩かけにかくれた様子です。飛行機が通りすぎたので、安心して又掘り出したらしく旋回して来た飛行機に気付かなかったのです。喰うものがなくなつていたせいもあって一生懸命掘つていたのでしよう。狭い段々畑にロケット弾を二発も撃ちこまれ、畑から數十メートル離れた所に吹きとばされてたおれっていました。島中の人で探したのですが股の所に弾の破片がつきささり死んでいました。

まわり四キロばかりの小さい島の事とて、飛行機がいつどこからとんで来るのか、それを警報する事も出来ないまま、海面すれすれに飛んで来て特に島の裏側から襲われると逃げるすきも与えない状態で、畑作業は危険なものとなつたのです。甘藷の植付が出来なくなれば、もう喰う物がありません。島中に生えている蘇鉄は所有者がきまつてしましました。それも次第に欠乏して来ました。ウブ島（宮古本島）には大神島対岸の島尻方面から、南鶴園あたりにかけて蘇鉄が野生しているとの事でした。夜、くり舟をこいでウブ島にたどりつき、カヤの生い茂る中に分け入つてそれを切りたおし、夜が明けぬうちに浜まで泳び続けました。調理の方法をまちがえれば中毒死する事もわかつて、いながらその蘇鉄さえも、小さな離島では不足していました。

大神島ウヤガム祭もとだえて

薺のあい間を見て、海におりるのであります。いつ飛行機が来るかあぶないから、遠い沖合には行けないのであります。島の近く、東北部せいぜい一キロくらい今までが漁場になります。そこに海面から突き出たきの子状の岩があります。空襲が来たらその下にかくれる事ができるのです。

二十年の一月頃でしたが、朝の空襲飛行機が去るのを見とどけて、魚とりに行きました屋の定期便が来るには間があると思ついたら、予想しているいつもの時間より早く空襲機がとんで来たのです。くり舟をこいで島にたどりつくには間に合わないし、その岩おかげに飛行機の来る方向から身をかくしてしまった。島の東北部海岸に直經十メートルばかりの巨岩があり、その岩の下を掘つて防空壕にしていました。家を焼かれた人々が住んでいましたが、その岩をめがけて急降下して行くのです。岩は海から見ても周辺に散在する大小の岩で人影は見えないので、その岩にロケット弾を撃らおとして行くのです。四散する岩の破片が海中に落ちて行くのが見えるのです。島の半数の人はその岩影にかくれているはずです。飛行機が去るのを見とどけて、大急ぎでくり舟をこぎ帰り、浜にあがるなり大声で呼びながら、岩にかけより岩かけの穴をのぞきました。大きしながらも皆無事でした。岩の真上に弾は落ちていたのです。攻撃される直前に、逃げおくれた子供があとから入つて來たとのことで、その子を発見した飛行機はまとめて岩に向けてロケット弾を命中させた様子でした。海面から盛り上がる様に小高くそびえた大神島では、少しでも動くものがあれば飛行機からはすぐ発見できたのでしょうか。岩が厚かつたおかげでその子を含め、島の半数の人々

宮古本島に日本軍が来た頃、大神島へも兵隊が何回か来ました。が、陸地を作るにも島が小さすぎるせいか常駐する部隊はいませんでした。

漁撈班を作れという軍の命令で、佐良浜の青年三人と大神島からは狩俣米吉さんが加わって四人で魚をとつていました。兵隊が島に来て、自分たちは海には行かず、浜で待ちかまえていて、とつて来た魚はみなもつて行くのです。たまにくり舟に乗つて、一緒に沖に行く事もあったのですが、兵隊たちは自分たちでもぐらうとはしなかつたそうです。舟の上で漁をするのを見ているだけで、とつた魚を、ごまかさないと監視の役目をしていました様です。

島にいる男性には若いものは召集されていなくなり当時四十代の私にも防衛隊入隊の軍令が来ました。大神島から十六名行きました。狩俣部落の西側にあった部隊で、将介石に似たわら人形を銃剣で突く訓練を受けました。

大神島が空襲されているのを狩俣遠見台の岩陰にて見ました。島の裏側から土煙がもうもうと立ち昇り、丁度その時は煙で甘藷掘りしていた伊佐さんが吹きとばされて死んでいたのです。帰島許可をもらつて、くり舟をこぎ、大神にたどりつくと西の浜で人が五六名がやがやさわいでいた。島内で戦争による犠牲者が出了事を知りました。相次ぐ空襲の中で、島内で待機する様命令が出ました。空襲が日を追つて激しくなつてからも、大神島は海にかこまれて、海の魚で生きて行かなければなりません。飛行機の来ない空

は命びろいをしたのです。

空襲下の漁撈は沖にいる時も命がけですが漁を終えて帰つて来てもくり舟は擬装しておくのです。カヤを刈りとつてそれで覆かくしておくのです。風が出て、カヤが吹きとんでいたら舟をこわされし、生活手段を失なう事になるのです。

西のパサキ浜にくり舟をつないであつたのでカヤの葉が枯れていたし、それを換えに行きました。新らたにカヤを刈りそれを舟にかぶせている時でした。爆音がきこえたかと思うと大きな飛行機が南の方から飛んで来るのであるのです。あわてて岩かけにかけより身をかくしました。それと同時に爆弾が落され九十メートルばかり離れた海中にものすごい水煙が立ち上がりました。その部分の海は海底が砂地になつていて、砂の混つた水煙りであたりが見えなくなつてしましました。もう少し近かつたら、くり舟ごとこっぱみじんにやられる所で、飛行機が遠のくのを見定めて、逃げ帰りました。部落ではクマツ（伊佐さんの別名）が西の浜でやられたとさわいでいましたが飛行機からくり舟をかくしに行つてあやうく命を落とす所だったのです。

戦争が始まる前までは島の歴史始まって以来の長い伝統として続いているウヤガム祭も、命あつての事だから、とだえてしましました。最近、ウブバリ屋の次男、久貞金三氏を葬つた所で洗骨の風習に従つて洗骨していたら、左の背の骨に機銃弾がさびて突きささつたまま、葬られていた。負傷したまま、弾を抜きとる手当を受ける事もなく死んで行ったのです。

下地ビキは機銃弾で負傷し、戸板にのせて海岸はたの岩かけに寝かせたままの生活をしていました。傷口を潮水で洗うだけが唯一の治療法でしたが、避難している岩礁のそばに又爆弾が落ちあやうく死ぬ所でした。

池間島

大神島とほぼ同じ条件下で、日本軍隊の常駐はなかったが、島の北西部に位置する当時の宮古群島唯一の灯台とその付属建物は、十九年十月十日に始まる空襲以来の攻撃目標となる。灯台をはずれた爆弾が民家に落ち、灯台の建物は文字通り蜂の巣の様な状態となりその一部は今も現存している。

漁船の停泊港としての池間港も空襲にさらされ、近在する池間小学校舎が廢墟同然になる猛烈爆下で三人の死者その他、負傷者、発狂する人が出る。

(友利恵勇)

医療及び食糧問題をめぐつて

池間島 前泊 マツ (十四歳)

昭和十八年十月頃までは、戦争が勝つようになると島の大主神社に毎月八日に武運長久祈りに学校の先生に引率されて通いました。十六年十二月八日に太平洋戦争が始って、宮古本島から神主が来たりして必勝祈願をしました。

小学校高等科一年生の頃です。皆モンペを着用していました。体

泳いで来ました。神風特攻隊とか云っていましたが、その三人の飛行兵が、浜辺で泣いていました。
食糧事情がだんだんと悪くなり、沈船から引き揚げた、くさい米や、疎開した人たちの残して行った畑の作物をたべる様になりました。くさい米のたくわえの切れた人々は、蘇鉄の幹を食べる様になり栄養失調でやせこけた人が目立つてきました。次第に空襲が激しくなり、池間島も連日の空襲にさらされました。

特に池間の北西にある燈台をめがけて宮古島へ飛んで来る飛行機は必ず池間島を襲うのです。爆弾がそれで、部落西側の民家に落ちたり、島の人々は、もう、部落の中には住めなくなり島の周辺にある自然壕の中に住むようになりました。

東部にある、バリナウアブ、マウナウマガスシ、北部のトイナスアブなどに入り、それで部落中の人がいっぱいになると、今度はウブ主が墓をあけてその骨をのけ、失礼しますと云つてその中に住み込む様になつたのです。今にして思えば、とても出来る事ではないのですが、人の骨を枕にして寝ていたのですから、おそろしい事です。

ただでさえ温氣の多い穴ぐらの中は、雨が降ると、ジトジトと温つて来る。水浴さえ連日の空襲ではできません。ノミとシラミは夙く様に出て来る。それをとるのが毎日の日課になつていきました。それに加えて、ブトに喰われるとそこは化膿するのです。逃げおくれて、負傷する人が出はじめました。内間のおばあ、友利のおじさん、勝連のおばさん達は太ももを機銃弾でやられたり、腕をやられたり、離島で、医者にも連れて行けず、たとえ連れて行

育の時間は、空襲にそなえて、消火訓練と云つて、バケツで送水作業をしました。水の少ない島だから、浜辺の海水を一列に並ばせ運動場まで送水しました。学習時間がほとんどなくなり毎日、その訓練をさせるから、とうとう手の皮がすりむけてしまいました。

十九年の十月十日に宮古に来た空襲の時は池間島は無事でした。

初めは日本軍の飛行機だと思っていましたが、絶対に日本は勝つべきだと教えられていましたし、日本軍の輸送船もたくさん平良の港に入港して行くのが、池間島からよく見る事が出来たし、そう簡単にアメリカの飛行機が来るわけないと、おとな達も云っていたのです。

そのうち飛行場あたりと思われる所に黒煙があがり、漲水港に停泊している船をめがけて、飛行機が無気味な音を立て急降下してバラバラと弾を撃っているのです。これは本物の空襲だとさわぎ出しあわててガマ(自然洞窟)の中へ逃げました。その日の午後になつて再び来た空襲で、港の船は黒い煙を出し燃えながら沈んで行きました。間もなくあの船は広用丸といつて米を滿載していたという事が伝わりました。米は配給制だったし、もつたいないと云つて、大人たちは、夜、沈船の米を引き揚げて来ましたが、沈められて数日たっているし、ものすごく大きい臭いを出していました。私たちはタウンコマイクと呼んでいました。家々では庭先に、海水でふやけた悪臭を発する米を干す風景があちこちに見られました。西の浜に、空襲でやられた船の人が死体となって流れつきそれから間もなくして、池間島のみず浜のリーフの上に日本の飛行機が落ちたというのでそれを見に行きました。三人の飛行士が浮袋をふくらませて

くにしても海を渡る事は危険との上もないし、連れて行った所で町の中に人は住んでいないと云うし、医者も居ようはずがないと云つてとうとう、そこが化膚し、くされてしましました。家も私の知つているだけで四軒燃えているのですが、送水訓練の時にバケツで運んで、消すと云うわけには行かないのです。飛行機は、確実に火の手が上るまでは機銃掃射をして燃えさかるのを見とどけるまでは去らないのですから。

池間の港につないであつた漁船の重宝丸やその他の中型漁船のほとんどは、爆撃され、浜辺のくり舟にいたるまで、焼かれてしましました。

軍の命令で、空襲下でも魚とりをさせられていた男の人たちが、機銃弾を受けてくり舟をこわされ、泳いで帰つて來たともぐつて遠く離れた浅瀬にたどりつき、その岩かけがあつたから命が助かつたと、話していましたが、私たちもおいつめられてやがてそうなるのではないかと、おぞろい想いでその話を聞きました。

燈台守で伊江島の人がいましたが、その人も召集されていなくなり、台長の土井長作という人が、燈台を離れて奥さんと一緒に島の人たちと壕の中に住んでいました。

灯台のそばにあったコンクリート作りの宿舎は機銃掃射されて蜂の巣のようになり、今でも残っています。食糧不足が深刻化して星間は飛行機が飛んで来るし、夜月のあかりでいも植え作業をしました。

間もなく八月十五日が来て、終戦となりましたが、それからあとが、益々食糧が不足したのです。わずかばかりとれた小魚をアマダ

(金網)にのせて焼きそれを平良の町まで運んで金に換え、その金でいもを買ひに、宮古本島は島尻、大浦あたりまで行くのです。どくも食糧は不足しているから簡単には売つてくれません。足を棒にして歩きまわり、どうしても家にもつて帰らねば喰うものがないから、わずかでも分けて與れと頼み込みました。一軒だけ分けてくれる家があると聞いてそこをたずねました。忙しいからいもは掘れないと、もし、自分達で掘るなら分けてくれると云うので、夕暮れもせまる中を疊二枚分くらいを分けてもらい、有難たく、そして心細い想いでいも掘りをしました。

今、子供たちに話して聞かせても「まさか」と云う。わからないのです。

指導員

池間島 山里勝助（二十七歳）

昭和十八年当時、青年学校で軍隊の経験者と云う事で、指導員をしていました。月給四十五円でした。それで、イモ三十斤買うともう給料はないのです。生徒達の家から、いもを少しずつもって来てもらひ、それで生活を支えるのです。父兄たちの間から「ムーガー教員」（いも皮の教員）と云う言葉が駄かれて始めたのは、その頃です。

小学校を卒業して、満十五歳以上、徵兵検査前の二十歳までの青年を軍事教練しました。当時、三百名くらいの在籍だったと思いま

す。

銃剣術や、腹ばいになって手と足で歩くほふく前進の訓練や、分行進の練習などを池間小学校の校庭で教きました。

十九年五月になつて飛行場を宮古本島に作る事になり年長者を三十名ずつの四班に分け、下地陸軍飛行場へ引率して来いと云う動員令が、軍命令で出ました。

くり舟を漕いで、狩俣へ渡りつき、そこから下地まで歩いて着くには四時間はかかります。その頃は、空襲はなく道路は安全でしたが死にものぐいで歩かない、作業開始の時間に間に合わないのです。午前四時頃から起きました。

これでは時間の浪費が大きすぎ体も続かんという事で、下地に分散民宿しました。飛行場の周りに作業要員のためのバーラック建ての宿舎が出来上りそこで寝泊りして毎日滑走路の整地をしました。五か月後に十月十日の空襲が始まりましたが作業要員を交替させたため、池間まで帰らねばなりません。道路を歩いていると、いきなり爆音が聞こえて来ます。そこがアダンバのヤブの中であろうと、そのとげに刺されようとかまっておれません。道路わきの茂みの中へ逃げこみました。息を殺して、じっと飛行機の去るのを待ちましたが、そこにむらがる蚊に刺され放だいになり、マラリアを発病する者が出て来ました。池間にはもともとマラリアなどはなかつたのですが。

燈台下の浜で、軍の舟艇が空襲を受けて沈んだと云う知らせがあり、その救助作業をしました。四人のケガした兵隊の手当をして、狩俣の浜まで運んだのですが、小さなくり舟の上でいつ来るか年の末ごろ、奥さんとともになわれ、本島へ引き揚げて行きました。

間もなく、私はマスパリの防衛隊に、召集されました。食糧をとつて来いと云う事で、島まで帰る事になりました。夜道を歩いて浜までたどりつき、くり舟を出したのですが、上空で飛行機の音がし

食糧難

池間島 長嶺ミヤ（三十三歳）

分らない空襲機を思うと気が気でなりません。やつとの思いで、狩俣の浜まで運ぶと、待っていた軍用トラックで運こんで行きましたが、「ありがとうございます。」「御苦労」の一言も云わずに、運び去りました。狩俣に軍医がいる事は分っていましたが、民間人が、ケガしたり病気になった場合は大変です。その軍医が診てくれるかどうかが問題で、簡単には受けつけてくれないと云う事で草の葉などをすりつぶして民間治療法に頼っていました。

間もなく、私はマスパリの防衛隊に、召集されました。食糧をとつて来いと云う事で、島まで帰る事になりました。夜道を歩いて浜までたどりつき、くり舟を出したのですが、上空で飛行機の音がして、暗いから見えないと安心していたら、真昼の様な明るさになり、機銃掃射をうけました。照明弾を投下して射撃するのです。弾にさえあたらなければ泳ぐ事は出来るのだからと、くり舟の中でじつとうずくまつていましたが、近くの水面にはじける弾の音がピシッピシッときこえるのです。今日はもう命の終りだと、覚悟した。夫の私が宮古にいるならと疎開命令を拒否して、池間島に残った家内は、小さい子供四人をかかえて、避難生活が大変です。家内は午前二時か三時に起き、一日分の食事の用意をして、むづかる子供達を起こして、東北の浜にあるマスパリ壕まで歩かねばなりません。持てるだけの荷物をもつて二歳になつたばかりのヨチヨチ歩きの長男をせきたてて夜が明けぬうちに壕まで着いていないとあぶないのです。

連日の空襲で学校も廃墟の様になりそのショックで校長は精神異状を来たしました。沖縄本島出身の人でしたが宮古があぶないとい

う事で、沖縄本島へ引揚げさせた子供たちの安否を気づかってか、北の方向に向かって手を合わせ毎日すわり込んでいます。学校はメチャメチャにこわされているのに、そこを離れないと頑張っているのです。戦争が終つたあと人の来訪があると押入れの中にかくれて会わない。極度の恐怖症にとりつかれていきました。昭和二十年の末ごろ、奥さんにともなわれ、本島へ引き揚げて行きました。

潜水艦が電波探知機を使って発見するから、船から、塵一つでも落してはならないと厳しく命令されていたこの様子では、無事日本までたどりつけるかどうかやぶまれていました。どうせ海の上で死ぬだと覚悟しながらも、小さい子供たちには浮袋をつけさせました。横浜港に着いてからは汽車の中でも、同じ目じるしの鉢巻をしめさせられ、トラック島や、航海中の様子など話してはならぬ

と申し渡され、スペイがこの中にもいるかも知れぬと、物も云わざぬ状態で監視の人をつけて、神戸まで送られました。

池間に帰つてからお産をしましたが、過労と栄養失調で、あはら骨が数えられる状態で、乳も出ません。

間もなく池間も空襲を受ける様になり、島の西海岸にあるカナバタツといわれている自然洞窟に避難しました。島の前里地区の人々が三十名ばかり一緒にしたが、ヤブ蚊が群がり、子供たちも良く寝ない。うちわでそれを追いながら、寝かせつけようつとめるのですが私も座したまま睡眠時間は三時間くらいしかとれません。そのうちとうとう上の男の子が発熱してしまいました。初めは微熱でしたが、薄らしい薬もないまま壕から出して良い空気を吸わせて日光浴でもさせたいのですが、続けざまに来る空襲のためにそれさえも出来ませんでした。壕の中に身動きのとれない状態で、とうとう悪化させてしまいました。子供の泣き声を出したら、飛行機が聴くと云われ、たまたまはじける様な機銃弾の音におびえた子供たちが泣き出すと、それ見た事かと、子供たちのために皆死なつてしまいかと云われるのです。夫さえ一緒にいれば、こんな肩身のせまい思いをせずにすむものをと思ひながらも、どうしようもありません。そのうち男手のある家は食糧も進つて来ます。空襲のあい間を見では魚などもとつて来る、ウンコ米と云われていた、くさい米でもとつて来れるのです。苦労すると人からも見捨てられるものでしょか、私たちには着物を食いつなぎでいましたが、食糧のゆとりがある家は、私たちを見るに見かねてか壕から出て行きました。同じ境遇の人たちだけが残り、食糧確保の出来る人たち

は別の場を求めて去つて行つたのです。
喉からさえおとせば、おなかは分らないと蘇鉄の幹を食べ、雑草を食いつなぎ、一分間でも、一日でも生きながらえねば、この子供たちもろともたおれると想いながらも、乳飲児と病気の子供をかかえていては身動きがとれないのです。水だけ飲んで過す日が続きました。粗末な食べものが、水に混るのですからとうとう胃をこわし、ひどい下痢におそれました。水だけが、音をたてて、体の中をはげしい勢いで通り過ぎるのです。体の色が黒ずんでしまいました。思いあまって、壕の近くの畑にあつたラッキョーを盗つて来ました。それを知られて、おこられ、つらい思いをしました。

あの時の病気をこじらせて、その後も長男は病氣がちとなり、十三歳の頃はとうとう脊髓カリエスに移行してしまいました。

戦争が終つて昭和二十年の末ごろ夫はトランク島から帰つて来ましたが、自分さえれば、戦争さえなければこんな事にはならなかつたと、半生をかたむけたすべての財産を失ない、身体障害者となつた子供を育てるのにいろいろ仕事もやつて見ましたが、うまく行きません。イカ釣りに出かけたまま、とうとう不帰の人となりました。経済大団だといながら、日本国は私たちの失なつたものをどうしてくれるのだらう。

もしも、再び徵兵検査をするなら、私の子や孫には、そんな事はさせないと、斬るなら斬つて捨てなさいと、徵兵に行くくらいなら白旗を立てて座つていなさいと、これを遺言にするつもりでいます。私たちと前後して、トラック島から引き上げる時、別の船に乗つていた宣保さん一家は魚雷攻撃を受けて船は撃沈され、小さなボ

ートで一週間も漂流を続けて、十名のうち六名まで死んでして、姉はボートの中で死亡、生き残った者は、おしつこを手にためて飲み、生きのびている所を救われたとの事ですが、身よりもなく、一人で住んでいます。

来間島

山砲隊を中心とした警備隊二十名が常駐し、それに加えて部落の青壮年者三十六名が防衛隊として召集される。中飛行場あたりで効力を発した現地開発の地対空豊式砲からヒントを得たと思われる野戦投射器の試作実験が進められ、その試射が山砲隊員ではなく、防衛隊員の手で行なわされる。それは暴発事故となり二人の人を無惨な死に追いやる。

陣地妨害という理由で島民住居の強制退去をせまり、蛋白資源として家畜類が徴収され、耕作地とり上げが行なわれた。模擬電波探知機を島の北岸に築いたため、そこへの攻撃が多く流れ弾を民家に落とし、五世帯が焼失している。

(友利恵勇)

来間島の出来事

来間島 奥平文子（二十三歳）

昭和十九年十月、来間小学校に就職しました。十月十日の初空襲の折、対岸の下地の飛行場あたりをくり返し爆撃を加えていました

山砲隊を中心とした警備隊二十名が常駐し、それに加えて部落の細仕事も私がしなければならなくなり、学校を退職したのです。最初のうちはいももたくさん植つけてあつたし、主食に困る事はなかつたのですが、今度は祖母が病床についてしまって、日に日に弱つて行くのです。栄養をつけてあげようにも、魚や肉を買う金がなく、空襲機が飛んで来る前に朝六時頃起きて、浜辺や崖の下をカニを探し歩いて、一匹でも捕えたら、それはもううれしい。カニがとれない時はアーサ（ひとえ草）をとつて来ておつゆを作り、医者に診せる事は出来なくとも、これで少しは命をのばす事が出来ると毎日夜明けの涙を歩きました。

植付けたいもが残り少くなり、主食にも事欠く状態が考えられました。平良の町で、北部あたりにトーモロコシを持っている家があるという話を聞き、大事にとつておいたカボチャの大きなのを二個かついで交換しに行きました。

いつとんでも来るか分らん飛行機におびえながら、海を渡つて平良まで行くのは命がけです。一升程分けてくれたそのトーモロコシを手の皮がむけるまでひいて、蘇鉄の幹の軟い所をむしりとり、それを粉にしてませ、うすいおかゆを作つて節約しながら食いつなぎました。野菜などは全くなくなり、いもづるの葉や、春のねぎしを食